

令和元年度
作文コンクール

受賞作品集

テーマ

「わたしの住む町」



チャレンジいばらき県民運動／公益財団法人 日立財団

令和元年度 作文コンクール

1 目的

未来を担う子どもたちに、茨城の豊かさや暮らしやすさ、伝統文化のすばらしさに加え、茨城の科学技術を再認識してもらうため、「わたしの住む町」をテーマに作文を募集し、個性と創造性に富む心豊かな人づくりを目的に作文コンクールを実施する。

2 主催 チャレンジいばらき県民運動 公益財団法人 日立財団

3 後援 茨城県 茨城県教育委員会 公益社団法人茨城県青少年育成協会
株式会社茨城新聞社 株式会社茨城放送 NHK水戸放送局
毎日新聞水戸支局 読売新聞水戸支局 朝日新聞水戸総局
産経新聞社水戸支局 日本経済新聞社水戸支局 東京新聞水戸支局
茨城県学校長会 茨城県PTA連絡協議会

4 テーマ 「わたしの住む町」

5 対象 茨城県内の小学校・中学校，義務教育学校，中等教育学校及び特別支援学校に通学する児童・生徒

6 募集期間 令和元年6月10日(月)～9月6日(金)

7 部門及び応募数

部門	応募数
小学校低学年の部	1,938
小学校高学年の部	3,555
中学校の部	6,942
合計	12,435

8 表彰

茨城県知事賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名
日立財団 小平記念賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名
茨城県教育委員会教育長賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名
茨城新聞社長賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名
チャレンジいばらき県民運動 理事長賞・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名
日立財団 奨励賞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30名

9 審査・選考

チャレンジいばらき県民運動に設置した「作文コンクール審査会」の審査（令和元年10月3日及び10月31日開催）により各賞を選考した。

審査委員：21名

委員長：川嶋 秀之（茨城大学教育学部教授）

副委員長：床波 忠明（公益財団法人 日立財団 常務理事）

委員：田口 克弥（茨城県教育庁総務企画部参事兼生涯学習課長）

岩田 利美（茨城県教育庁学校教育部参事兼義務教育課長）

内桶 博仁（茨城県教育庁学校教育部特別支援教育課長）

大高 茂樹（株式会社茨城新聞社 編集局報道部担当部長）

潮田 昌造（公益社団法人茨城県青少年育成協会 副会長）

小林由士郎（チャレンジいばらき県民運動 専務理事）

県民活動推進員：井坂 英二，大久保 昌義，池田 智子，加藤 欣一，川野 和彦，
河野 公房，菊地 寿代，古山 均，島田 百子，菅谷 京子，
寺内 義興，福間 智子，西村 重之

令和元年度

作文コンクール

受賞作品

茨城県知事賞	(3名)
日立財団 小平記念賞	(3名)
茨城県教育委員会教育長賞	(3名)
茨城新聞社長賞	(3名)
チャレンジいばらき県民運動 理事長賞	(3名)
日立財団 奨励賞	(30名)

茨城県知事賞

神栖市立やたべ土合小学校	二年	平野 雄大	この夏のであい……………	1
常総市立豊岡小学校	六年	成田 帆花	だがし屋のおばあちゃん……………	1
水戸市立国田義務教育学校	七年	戸崎 千尋	私がいる茨城の中の二つの町……………	2

日立財団 小平記念賞

つくば市立島名小学校	三年	眞家 花奈	わたしの住む町……………	4
つくば市立秀峰筑波義務教育学校	四年	川端 陽太	ぼくの自まんの筑波山……………	4
つくば市立大穂中学校	二年	高島 怜也	公共交通で脱車社会……………	5

茨城県教育委員会教育長賞

日立市立久慈小学校	二年	神白 茅里	わたしのすむ町……………	7
石岡市立小桜小学校	五年	塚田 陽葵	自然を守るすばらしさ……………	7
つくばみらい市立伊奈中学校	一年	小林久美香	私のまちの田園風景……………	8

茨城新聞社長賞

水戸市立常磐小学校	一年	菊池 颯真	ぼくのすむまち……………	10
石岡市立高浜小学校	六年	廣原 瑛太	いがっぺ よがっぺ 茨城弁……………	10
古河市立三和北中学校	三年	指首 雄太	私の住む町……………	11

チャレンジいばらき県民運動 理事長賞

取手市立宮和田小学校	三年	間下 拓海	ぼくらの町のもみの木公園……………	13
那珂市立瓜連小学校	六年	正田 真優	歴史を感じる場所、瓜連……………	13
桜川市立岩瀬西中学校	二年	荒木 優作	桜咲く里……………	14

日立財団 奨励賞

つくば市立桜南小学校	一年	桑田 咲月	ふるくてあたらしいわたしのまち……………	16
坂東市立岩井第二小学校	一年	落合 凱飛	ぼくとおかあさんのとっておき……………	16
石岡市立石岡小学校	二年	中島 琉夏	おぼんのおむかえちようちん……………	17
ひたちなか市立長堀小学校	二年	高橋 英之	いばらきのほしいものみりよく……………	18
東海村立白方小学校	二年	齋藤陽和花	わたしのすむ町……………	18
日立市立大沼小学校	三年	小泉ころ	わたしの大きな海……………	19
結城市立江川南小学校	三年	一ツ木夏凜	わたしの感じたゆうき市……………	20
北茨城市立精華小学校	三年	小松崎奏吾	ぼくの住むまち……………	20
つくば市立みどりの学園義務教育学校	三年	関根 壮良	緑の多いぼくの町……………	21
筑西市立鳥羽小学校	三年	穂積 里紗	大すきなわたしの町、筑西市……………	22
取手市立桜が丘小学校	四年	菊地 花音	人とのふれあいを感じられる町……………	22
ひたちなか市立東石川小学校	四年	熊谷 桜子	私の住む町のお祭り……………	23
稲敷市立江戸崎小学校	四年	平山 陽菜	私の育った町江戸崎……………	24
土浦市立都和小学校	五年	和地 夏希	土浦全国花火競技大会……………	25
ひたちなか市立那珂湊第三小学校	五年	網代 彩葉	伝統あるわたしの町……………	26
常陸大宮市立大宮小学校	五年	益子 成美	大好きな常陸大宮市……………	27
那珂市立菅谷西小学校	五年	笹島 佳祐	ふるさと自まん「菅谷祭」……………	28
つくば市立荃崎第三小学校	五年	大河内彩楓	わたしの住む町……………	28
龍ヶ崎市立八原小学校	六年	工藤 賢信	ぼくの町の自慢、竜ヶ崎線……………	29
牛久市立牛久小学校	六年	北村 千華	私の町を支える人……………	30
茨城大学教育学部附属中学校	一年	佐々木あすか	知れば知るほどおもしろい私の街水戸……………	31
土浦市立土浦第四中学校	七年	井口 裕貴	私の住む町の伝統行事……………	32
筑西市立下館中学校	一年	古橋葉津香	自然豊かな勤行川……………	34
大洗町立南中学校	一年	近澤 夏海	大切な町……………	35
水戸市立赤塚中学校	二年	岩崎 真麻	私の町と暮らしと風景……………	36
土浦市立土浦第一中学校	八年	染谷 音羽	私の町の魔法使い達……………	37
高萩市立秋山中学校	二年	作山 叶恵	五感で感じる茨城の魅力……………	38
茨城県立並木中等教育学校	二年	菅原 紡宜	つながり……………	39
日立市立助川中学校	三年	松下 彩菜	私の理想の町……………	40
東海村立東海南中学校	三年	相澤 萌夏	私の住む町……………	42

この夏のであい

神栖市立やたべ土合小学校 二年 平野雄大

「おい、こつちだよ。」

かいとにさそわれて、あみをもったぼくは、走っていく。見えてきたのは、どうどうとそびえたつ一本の大きないちよの木。はっぱは、まだみどり色。ひはのぼっていて、六時前だというのに日ざしがまぶしかった。

「あつ、いた。いた。いっばいいるよ。」

いちよの木の上のほうには、クロのかたまりがたくさん。そう、それは：ぼくがあいたかったカブト虫だ。あわててあみをおしつけた。カブト虫は、木の高いところにてとどかない。かいとのもつていたあみとぼくのあみをつないで、もういちどカブト虫をめがけて木におしつける。なかなかとれない。あいつはひっしに木にしがみついている。ぼくとしようぶ。ぼくもひっしにあみをうごかしたり、えだをゆすつたり。そしてついに、ぼくのあみの中には、オスのつの長いカブト虫が一びき。ぼくは生まれてはじめて、カブト虫をつかまえた。それからもむちゅうになってカブト虫をどんどんつかまえた。ぼくのおでこには、あせがキラリと光っていた。

この夏のであいは、ぼくにとつてわすれることのできないむねおどるけいけんとなった。この大きないちよの木、く

ろぐろとして力づよいカブト虫。ぼくのすんでいるいばらきは、大しぜんにめぐまれていることに気づいた。それは、とてもしあわせなことだ。ぼくは、いばらきが大すきだ。またらい年の夏がまちどおしい。

だがし屋のおばあちゃん

常総市立豊岡小学校 六年 成田帆花

私の家の近所に、だがし屋があります。古くて、せまくて、昔っぽい雰囲気です。十秒くらいで全部のおかしを見られるほどの品数だし、値段も一個十円や二十円の小さなだがしばかりで、今一番のお気に入りには、三十円のねりあめです。私は、コンビニやスーパーのおかし売り場よりこのだがし屋が好きです。理由は、このお店のおばあちゃんが大好きだからです。

おばあちゃんはだれにでも気さくに話しかけてくれます。低学年のころは、だまって首を横にふるだけだったけれど、少しずつ会話ができるようになりました。

「これと、くじのガムもください。」

「全部で百円ね。今日は来るの早いね。」

「はい、今日は五時間授業だったんです。あ、外れちゃった。」

「はい、残念。」

スーパーでは一言も話さずに買い物ができるけど、ここではたくさん話します。おかげで、敬語が上手に使えるようになってきました。

私はこのだがし屋で買い物をするときは、百円分を買うことに決めています。今ではすんなり計算できるけれど、小さかったころはお母さんに教えてもらってたし算をしました。今は、妹に教えています。妹は両手を使って、

「これはいくら？」

と指を折りながら数えています。スーパーとちがつて一個十円や三十円ときりがいい値段なので計算しやすく、たし算の勉強になるのがこのだがし屋のいいところです。

また、お金の勉強にもなります。おばあちゃんは妹に、「茶色の、あなが開いていないお金が三枚ね。」と、ていねいに教えてくれます。これで十円玉を覚えました。

私のお母さんも子供のころ、毎日このだがし屋に通っていたそうです。ある日初めてひとりで買い物しようと、五円玉一枚だけを持っていくと、

「このお金ではこのチョコレートしか買えないよ。」

とおばあちゃんに言われて、そこで初めて五円玉と五十円玉のちがいを知ったそうです。お母さんも私や妹と同じで、だがし屋のおばあちゃんにお金の使い方を教えてもらったのだと知って、とてもうれいしいです。

ニューズで、よその地域ではだがし屋が減ってきていて、だがしを作る人もいなくなってきたということを知りました。私は、家のすぐそばにだがし屋があるのはとても幸せなことなのだと思います。おばあちゃんにはずっと元気でいてほしいし、お店もずっと続いてほしいと思います。そして、私がお母さんになったら、私の子供にもこの経験をさせてあげたいです。

私がいる茨城の中の二つの町

水戸市立国田義務教育学校 七年 戸崎 千尋

ゲコゲコゲコ……今年もカエルの鳴き声がたくさんきこえてきました。今、この瞬間もすすくと私たちの育てているお米は育っています。

私の通っている学校があるのは水戸の国田というところです。国田はとても自然がゆたかでも落ち着く場所です。一方、私が住んでいるところは那珂市の菅谷というところです。菅谷はスーパーマーケットに本屋さん、病院にレストラン、ないものは映画館くらいのもとても便利なところです。私は小学生のころから父の実家がある国田の学校に通っています。そして春には祖父母の持っている五つもの田んぼの代かき、田植え、秋にはこがね色になった稲を刈り取る稲刈りも手伝います。しかし代かきや田植えは毎年ゴールデンウィークに重なってしまい、せっかくのお休みに汗をびっしょりとかきながらどろどろぬかるむ田んぼに入り、手伝わなければいけません。私はそれがずっと嫌でした。どうして多く田んぼを持ったのか、どうして国田という、田んぼばかりのところに来てしまったのかと思うほどに国田が嫌いになりました。学校はきれいで、友達もみんな優しいです。ですが、近くにはセブイレブンと郵便局しかなく、他のお店は坂を上らなければなりません。虫も多くて夏に見かける蚊はとても大きくて刺されるととてもかゆいです。ずっと菅谷にいたい！と思います。しかし、今年の秋、私の考えは全て変わりました。

た。昨年の秋、汗をダラダラと流しながら私はカマで稲を刈っていました。稲刈りが終了してから一ヶ月後くらいの夕食のときのことでした。

「お母さん、このお米、何？いつもと違う味がするんだけど……」

「そのお米は今年とれた新米よ。おいしい？」

「うん！すごくおいしい！」

私がいつもとちがうお米のおいしさを感じたのは、そのお米が今年とれたばかりの新米だったからだったのです。私はそのとれたばかりの新米を笑顔ではおぼりつけました。私たちが育て、植えた苗がこがね色の稲に変わり、汗をかきながら刈った稲が米になり、その米をたくとこんなにおいしいご飯になるなんて！と改めて感動しました。新米はとても甘くて、口に入れるとフワフワ、少しだけ噛むとジュワつと甘さが口全体に広がっていきます。もう、おかず無しでも完食できるくらいに新米はおいしかったのです。このころから私は国田のこと、国田のお米のことに関心を持つようになってきました。国田の田んぼについて調べてみると、興味深いものがありました。

「国田は昔、大雨で那珂川がはんらんし、田んぼに栄養がたっぷり含まれた那珂川の水が流れこんだ。その水がひいた後も土に栄養が染みこんでいて、今も栄養のある、おいしいお米がとれている。」

私は納得することができました。そして、おいしいお米がとれる国田というところに私はお世話になっているのだと思うとほこらしくなってきました。国田は交通の便もよくない

不便なところですが、今地球から消えつつある自然を思いきり味わえるのがこの国田なのだと思ついたのでした。また、私の住んでいる菅谷はにぎやかで、本当にとっても便利です。近所の人もみんな優しくして夏にラズベリーがりをさせていたこともありました。

私は二つの地域で暮らすことで両方の地域の良さに気づくことができ、その良さを体験しながら生活することができて、とても幸せです。茨城県の中のそれぞれの市に色々な町や村に地域に豊かな自然があり、にぎやかなお店もあり、親切な人がたくさんいる、そんな茨城が私は大好きです。これから私の住む地域、お世話になっている地域の豊かさ、めぐみに感謝し、生活していきたいと思えます。



わたしの住む町

つくば市立島名小学校 三年 眞 家 花 奈

わたしの住む市はつくば市です。つくば市の人口は二十四万人です。二〇〇五年につくばエクスプレスが開きようしてから、人口がふえつつづけているそうです。毎年、夏休みになると、つくばちびっ子はかせをやっています。つくば市にあるけんきゅう所や大学を見学して回ってスタンプをおしてきます。けんきゅう所は、めったに入れない所です。中は広くて、しずかで、人はいっぱいいました。

わたしの一番のおきに入りの所は、「国土地理院」です。一かいのゆかには、日本の地図が大きくえがかれていて、3Dめがねをかけると、山が立体できにほこぼことうきあがって見えました。二かいにあがると、わたしの大きな地図記号クイズがあつてその時は、かならずやりました。学校でもならつてない地図記号がたくさんあつてべん強になりました。日本地図のパズルもあつてちよつとむずかしいですけど、姉といっしょに毎年やっています。

「ゆかりの森」の一かいには、虫のひょう本がたくさんあつて、見たこともない虫もたくさんいました。その場所でも、毎年スタンプをおしています。

今年一番長い時間いたけんきゅう所は、「さんぎようぎじゆ

つそう合けんきゅう所」です。姉といっしょにし外線にはんのうするビーズストラップを作りました。作り方がむずかしかったので、係の人におしえてもらいました。始めは、ただの白いストラップで、本当に色かわるのかふあんだったけど、外に出て見ると、こいむらさき、ピンク、黄色に色がかわりました。

けんきゅう所に行くときふだん出来ないような体けんが出来ます。つくば市に住んでいるから、けんきゅう所が身近に感じられ色いろなイベントにさんか出来てべん強になります。けんきゅう所があるつくば市が大きいです。

ぼくの自まんの筑波山

つくば市立秀峰筑波義務教育学校 四年 川 端 陽 太

ぼくの住んでいる家からは、筑波山が大きく見えます。ぼくにとつてそれは、生まれた時からだったのであたり前の事でした。

しかし、遠くから来た親せきの人や、お母さんのお友達が遊びに来た時に、

「すぐくながめがいいね。」

と、みんなぼくの家から筑波山を見て、口をそろえてそう言います。

「なんだかちがう県に旅行にきたみたい。」

そんなことを言われたこともあります。

ぼくとお姉ちゃんが学校に通う時も、もちろん大きく見え

るので、いつも気持ちよく学校に通うことができている。
「今日は筑波山がくもっていて半分見えないから雨がふるかもね。」

おばあちゃんが、学校に行く時にそう言いました。この地いきに住んでいる人はよくそんな風に筑波山を見て天気を予想するそうです。天気予ほうの役目もする筑波山って、本当にすごいなとびつくりしました。

そして、ぼくの家のうらには、ずっと田んぼが広がっています。田んぼに水が入る時期になると、その水の中に筑波山がうつります。それがとてもきれいなのです。

夜になると、筑波山にあかりがともり、また昼間とはちがったよさがあります。

季節ごとに、筑波山の色もちがいます。ぼくは、秋のこう葉の季節も好きだけど、春の緑がおいしげって、木がブロッコリーのように見える風けいがとても好きです。

そんな筑波山を、いつも間近で見ることができるぼくは、とても幸せだなと思います。

そして、自まんの筑波山です。いつもぼく達家族を、どっしりと大きな心で見守ってくれているように思います。ぼくは、ありがとうございますと言いたいです。

これからも、自まんの筑波山に、ぼくたちが見守ってもらえるように、ぼくも勉強にスポーツに、何事も一生けん命がんばって生きていきたいと思います。

公共交通で脱車社会

つくば市立大穂中学校 二年 高 島 怜 也

「公共交通」僕はこれをテーマにして、学校の科学部で統計グラフを作りました。

公共交通とは、電車やバスなどの一般の人が共同で利用する交通機関のことで、茨城県には常磐線をはじめいろいろな電車やバスが走っています。しかし僕は、茨城では自家用車を利用して多くの人が多く、車がなかったら困るのではないかと感じています。統計グラフでは、茨城県の公共交通の課題を見つけ、解決策を提案しました。

まず茨城での課題を調べたところ、高齢ドライバーの運転免許返納率が低く、事故も多いことがわかりました。このような状況はとても残念なことだと思います。

そこで、なぜ高齢者が免許を返納せず、自家用車の運転を続けるのかについても調べました。高齢ドライバーが答えたアンケートには、免許の返納をためらう理由として車がないと生活が困るからなどがありました。さらに免許を返納したときに欲しい支援については、公共交通の発達や割引などの支援の充実を求める回答が多かったです。このことから、高齢者が免許を返納できない理由は、公共交通が発達していないために交通手段が自家用車しかないからだということがわかりました。

学校では中学生が公共交通についてどう思っているのかアンケートをとって調べました。すると不便に感じていること

として、駅が近くにならないことや混雑していること、利用方法や駅のどこに何があるのかわからないという回答が多くありました。

ところで、僕もあまり公共交通を利用していません。バス停までが遠かったり、バスの本数が少ないうえ、バス停を経由していくので遠回りで時間がかかったりするからです。統計グラフを作るときに、交通手段別で学校から道のり約八キロメートルのショッピングモールへ行くとしたときの所要時間を調べました。そうすると、自家用車だと約十三分で着くところ、バスだと約四十五分もかかることがわかりました。これは、自転車を利用したときの所要時間約五十三分とあまり変わらない結果でした。この結果を見て僕はびっくりしました。けれども、公共交通はいいなと思うこともありました。この前東京に行ったとき、駅のすぐそばのホテルに泊まりました。そのホテルには夕食がついていなかったなので、夕食をどこへ食べに行こうかと考えていました。初めは歩いて行けるところを探していましたが、電車を使えば一、二駅先の店でも簡単に行けることに気が付きました。だから僕は、茨城でもこのように公共交通が気軽に利用できるようになってほしいと思います。

このように現在は利用しにくいところもある公共交通ですが、これを改善し利用しやすくするために、統計グラフでは解決策をいくつか挙げました。まずバスの経路や時刻表を見直して、どこからどこへでも行きたいときにすぐ行けるようにすること、次に混雑については通勤時間を会社がずらす時差通勤や混雑時間帯の運賃値上げなどを進めたり、利用方法

や駅のどこに何があるのかわからないということについては、AR技術（拡張現実）を利用するなどしてわかりやすい情報発信をしたりすることを提案しました。

それに現在では、いろいろな地域で自動運転のバスやモビリティロボットなどの実験が行われています。このような新しい乗り物は、安全にたくさん走らせることができるので茨城でも実用化されるといいです。

これからは、茨城の公共交通を発展させるためにも、事故のない安全な社会をつくるためにも、公共交通を利用してきたいと思います。そして、将来は自家用車を運転しなくても快適に暮らせる社会にしたいです。



わたしのすむ町

日立市立久慈小学校 二年 神 白 茅 里

わたしがすんでいる町には、おとしよりが多いです。八年前に今のじたくに、ひっこしてきました。わたしはうまれていませんでしたが、東日本大しんさいのときでした。ひっこして二しゅう間ごとに、しんさいにありました。母の話では、だれもしりあいがいなくこまっっているときに、きんじよのおとしよりに、いろいろとたすけてもらったそうです。外でのたきだし、外でのかんいトイレ、いど水のわけあい、おとしよりが中心となつて、たすけあつたそうです。それがきつかけとなり、げんざいもよいおつきあいをさせてもらっています。

しかし、さいきんではおとしよりの車のじこにより、車のうんてんをやめた人も多く、この町のふべんなどころが多いとおもいます。一つは、バスが少ないことです。ちかくにはおみせがなく、あるきではいけません。びょういんはたくさんあります。おとしよりの足では、あるくのがたいへんだそうです。わたしのきんじよの人は、一人ぐらして、休みの日にかぞくがきてくれたときにかいものをすますそうです。ちかくにすんでいないのできゆうなようじや、びょうきになつたときがふあんだそうです。

おとしよりがふあんにならずあんしんな生かつをおくるためにはどうしたらよいか、かんがえました。一つはバスをふやすこと。あとは、おとしよりをきにかけてくれる、わかい人たちがきんじよにすんでくれることだとおもいます。しんさいのときとおなじく、たすけてくれる人がいることが、一ばんだいじだとおもいます。

自然を守るすばらしさ

石岡市立小桜小学校 五年 塚 田 陽 葵

「どうしてこんなところを走っているんだろう。」

私の家の近くでは一年中たくさんさんのランナーをみかけます。暑い夏でも寒い冬でも、都会からたくさんの方が来ます。一番多くのランナーが集うのは四月下旬に行われている、石岡トレイルラン大会です。家の目の前を走るランナーは、みんな笑顔でかそうしている人までいます。楽しそうにランナーを応援すると「ありがとう。」と手をふつてくれるので、毎年家族みんなで応援します。

トレイルランニングのみ力を調べてみました。ランナーはただ街中を走るよりも、山の中のアップダウンを走りきる達成感が得られるそうです。また、大自然を味わうことができるのがみ力だそうです。

そんな中で石岡トレイルラン大会は、初心者から上級者まで楽しめて、ゆたかな自然を満きつのできるので人気だそうです。緑がきれいで空気もすんでいると、たくさんさんのランナー

がコメントしていました。

「今日にしているこの山はそんなにすごいのだ。」と祖父に聞くと、三十年以上前の話を聞かせてくれました。昔、この山を切り開いて大きな建物やビルが建つ計画がありました。その時、地元の人々はみんな反対したそうです。たくさんのお金をもらうよりも、ゆたかな森ときれいな水を守ろうとしたのです。草かりなど、山の手入れをするのはとても大変なことです。それでも美しい自然を守ろうとしたこの地いきの人はすごいと思いました。おかげで今ではこの自然をみようたくさんの人が都会から来ます。また、たくさんの人が来られるように石岡市みんなが工夫してくれています。地元のおいしい野菜をおみやげにしたり、いちごを食べ放題にしたりして、ランナーを楽しませています。

ようやく、都会からなぜたくさんのランナーが来るのかわかりました。目の前の美しい自然は、ずっと昔からたくさんの人々の努力のおかげで守られてきたし、自然を守るには大変な努力が必要です。そのがんばりが都会の人を引きつけているのかなと思いました。これからは私達が守っていく番です。昔の人が守ってくれたこの自然を大切にしていきたいです。

私のまちの田園風景

つくばみらい市立伊奈中学校 一年 小林 久美香

サラサラと優しい音と共に、芽吹いたばかりの稲穂が波のように揺れている。夕方になると、飼い犬を連れて家族と散歩に行くのが私の日課だ。日中の暑さが和らぎ、田んぼの上を涼やかな風が吹き渡る。田んぼの周りでは、風が見える。まだ真つ直ぐな稲穂には、小さな白い花がついている。本当は匂いのない花だが、この緑の田園風景と相まって、爽やかな香りさえ感じる。

五月の初旬に、この田んぼで祖父の田植えの手伝いをした記憶がよみがえった。植えたばかりの苗は、茎も数本で弱々しく思えた。ちゃんと根付くだろうか、しばらくの間は苗の様子や田んぼの水が気になり、散歩のペースがゆっくりになった。しかし、今では太い茎が何十本にもなり、とてもたくましく見える。

稲の苗は、発芽から六十日目に、根元から新しい茎が出てくる。これを「分けつ」という。家族みんなが夕飯を食べていると、先祖からこの田んぼを引きついで祖父が得意そうに教えてくれた。話がはずみ、祖父の作ったお米がいつもより美しく感じた。

私の住んでいる地域には、かつて谷原三万石と言われた田園地帯が広がっている。祖父から、江戸時代初期に幕府代官頭の伊奈半十郎忠政が行った新田開発で出来た地域なのだということも教えてもらった。

祖父が調べた先祖の記録を見せてくれ、その先祖がいつからこの地域に住んでいたのかを聞いて驚いた。私の家の先祖は、江戸時代の初期頃「寛永」年間から、この地域で田んぼを耕していたことが分かった。ちょうどこの地域で、新田開発が始まった頃に、新田開発にたずさわって稲作農家になったのではないかと、家族みんなで想像をめぐらした。祖父と父は、まだ日本酒を飲んでいてご飯にたどりついていない。その日本酒の原料となっているお米も、この地域で栽培されたものだそうだ。

この田んぼには、田植えが終わると、ある生物が発生する。お腹を空に向けた仰向けの姿勢で泳ぐ豊年エビだ。尻尾が赤いので田金魚ともいう。

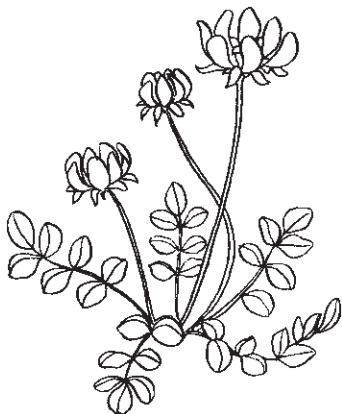
この豊年エビについては、小学生の時に友人と一緒に自由研究で調べたことがある。田んぼの隅で、気持ちよさそうに泳いでいる豊年エビを見つけたときは、胸が弾んだ。

豊年エビは、稲には無害な生物で、水中を泳ぎ回ることによって田んぼが活性化する。豊年エビが生息する環境は、良い田んぼの証でもある。

豊年エビの卵は、田んぼの土の中で休眠する。春になって田んぼに水が張られ、水温が上昇するとふ化する。また、卵を採取し、日に当て乾燥させると貯蔵も可能である。近年では、卵が観賞用のキットで売られていたりする。

おかわりしたご飯を食べ終えた弟。これからご飯を食べ始めようとしている祖父と父。それを笑顔で見守る祖母や母。家族に、豊年エビの話をしながら、田んぼも豊年エビも代々続いているのだなと思った。そして、私たち家族も。

いつも当たり前のようにある田園風景。時に、気持ちを落ち着かせてくれる優しい風と涼しげなせせらぎ。心がおどる生物の誕生。これらは、祖父のような農家の人たちが、代々米作りを通して守ってきた、大切な風景であり大切な自然だ。この大切な自然をこれから守っていくために、私は何が出来るだろう。茶わんの残り少なくなったご飯を食べながら考えた。まずは出来ることからだ。私は祖父の作ったお米を感謝しながら、一粒も残さずに食べた。



ぼくのすむまち

水戸市立常磐小学校 一年 菊池 颯真

ぼくがしょうがくせいになって、はじめてときわなつまつりにさんかしました。

がっこうにつくと、やきそばややきとりのいいにおいがして、これからはじまるおまつりにドキドキしました。たくさんの特トのなかにはちいきのおじいちゃんやおばあちゃんがいる、

「さあ、こっちにおいで。」

と、にこにこしながらぼくをよんでくれました。

ぼくはラムネをくれました。ラムネはふたをあけるのがむずかしくて、おじさんにてつだってもらいました。ピーだまがころん、とおちると、おじさんもよろこんでくれました。しゅわしゅわしておいしかったです。おまつりにはたくさんのおぼくのすむちいきのひとがじゅんびしてくれました。

「みんながつくってくれたなつまつりだよ。そうまはみんなのやさしさにかんしゃしようね。」

と、おかあさんがいいました。

なつまつりがせいこうしたのも、みんながえがおでたのしいじかんをすごせたのも、ここにいるちいきのひとのおかげです。ぼくはたくさんちいきのひとに、

「ありがとうございます。」
をつたえたくまりました。

みんなのやさしさをかんじ、ぼくのこころもやさしさでいっぱいになりました。これからぼくもおおきくなって、ちいきのひとがこまっていたらたすけてあげようとおもいました。ときわのみんながだいすきです。このまちでおおきくなれることがうれしいです。

いがつぺ よがつぺ 茨城弁

石岡市立高浜小学校 六年 廣原 瑛太

ぼくの住むこの茨城には、独特な方言があります。そう「茨城弁」です。

茨城弁は、だく音や半だく音が多く、語尾に「〜だつぺ」とつけるのが特徴的です。しり上がりのイントネーションだったり、早口でイとエの区別がなかったりもします。地域によっても、方言が強くていたり、意味は同じでも、言い方がちがったりもします。

また、「ごじゃつぺ！しみみしろ。（間抜けだなあ！しっかりとって。）」と、聞き取りづらく感じることも多々あります。強い口調のようにも聞こえるため、まるでケンカをしているのかと思う時もあります。メディアには、面白おかしく取り上げられ「茨城の恥」のような感覚にも思えます。そのためなのか、父や母の世代の多くは、茨城弁を知ってはいるものの、茨城弁を使わずに会話をしています。茨城弁を器用に使

いこなしているのは、お年寄りだけのように感じます。

ぼくの父は、老人ホームで働いています。その影響で、ぼくも時々父の会社で、ボランティア活動をしています。初めて訪問した時、お年寄りが、ぼくに話しかけてきました。

「おやあ、かんかだなあ。こっちこーよ。えんとして、しゃべっぺよ。」

何を話しているのかわからず困っていると、見かねた父が「かわいいなあ。こっちに來て座って話をしようって言っているよ。」と通訳してくれました。こんなにも難しい言葉を、家では使ったことがない父が、お年寄りの言葉を理解し、会話をしていることがとてもおどろきました。父は続けて言います。

「ここにいるお年寄りたちのおかげで、この茨城ができたんだ。そして、ここで生きるために茨城弁がつけられたんだよ。だからお年寄りたちを尊敬し、お年寄りとつながる茨城弁で話すことが、とても大切だ。」

ぼくは、会話が通じればいいと簡単に考えていました。しかし、それさえもできませんでした。どこかで茨城弁をバカにしていたのかもしれない。お年寄りたちの苦勞を感謝してなかったし、茨城の歴史や文化、茨城弁のできた意味も考えようとしませんでした。お年寄りに父が寄りそう気持ちや態度に「ぼく自身の恥」だったと気づかされました。

お年寄りたちが、長い時代をかけて築いてきたこの茨城で、豊かな生活を送るためにつくられた茨城弁は、とても大切なコミュニケーションのツールなのだと感じる事ができました。ただ言葉づかいが悪い「ごじゃっぺ」なものではなく、

人と人、茨城とぼくたちを結ぶ「いがっぺ」なものでした。

使われなくなっていく茨城弁、もう一度茨城弁の「結びつき」を見つめ直し、大切に伝えていかなければならないと思いました。ただ会話が通じるだけでなく、人と人との温かさを感じられるような、心と心が通じ合うような、そんな茨城弁を使っていきたいです。

私の住む町

古河市立三和北中学校 三年 指首雄太

私が住んでいる町は古河市です。古河市は関東地方のほぼ中央に位置し、栃木県、群馬県、埼玉県と隣接しています。電車で東京方面へ移動するのにも便利です。更に、圏央道が開通し、近隣に大型商業施設もあり、以前よりも住みやすい町になったと思います。

古河市には大きな行事が二つあります。

一つは「古河花火大会」です。まだ歴史は浅く今年で十四回目の開催となりますが、打ち上げ数が約二万発で関東最大級の花火大会です。今では古河市の夏の風物詩となり、毎年大勢の観客が訪れ古河の町が活気づくのは大変うれしく思います。また、打ち上げ場所となる渡良瀬川の河川敷の奥には渡良瀬遊水地があります。渡良瀬遊水地は、日本最大の遊水地で本州最大の湿地です。国指定の鳥獣保護区となっているので野鳥も多く、昆虫や魚類なども生息しています。また、希少な植物も多く、絶滅危惧種も発見されています。そして、

二〇一二年にラムサール条約に登録されたことにより、この豊かな自然は守られています。だから、花火大会に訪れた人たちにも渡良瀬遊水地の良さを知ってもらい足を運んでほしいと思います。私もまだ一度も訪れたことがないので、身近にある貴重な自然に触れ、その良さを自分の目で確かめ、肌で感じてみたいと思っています。

もう一つは「古河提灯竿もみまつり」です。毎年十二月に開催され、江戸時代から続く伝統ある祭です。その祭は、市内各団体が二十メートル近い竹竿の先に付けた提灯を激しく揉み合いながら相手の提灯の火を消し合うもので「関東の奇祭」と言われています。冬の寒空の下で提灯をぶつけ合う姿はとても迫力があります。しかし、今は花火大会の方が大きく宣伝されているように思います。開催場所の広さや観客人数が違うので仕方がないのかもしれませんが、この祭には伝統と技があります。私たちはそれらを受け継ぎ伝えていかなければなりません。それには一体何ができるのか、自分なりに考えて答えを見つけていきたいと思っています。

古河市は農業も盛んな町です。特に白菜、キャベツ、レタス、なすの生産量は全国トップクラスです。それに、市の土地利用の五割弱を農地が占めていて近郊農業が発達しています。しかし、その一方で農業離れも深刻です。耕作放棄地が五〇〇ヘクタールを超えるなど問題となっています。やはり、農業の後継者不足といえるのでしょうか。私の家は農家ではありませんが、農業に携わる人たちが減っていくのはとても残念な気持ちです。

現在私の家の周辺は田畑が減り、空き地には次々と住宅が

建設されたり、広い道路へと変化しています。それは、町から徐々に緑が失われているということですが、町が発展していくのはとてもいいことですが、子供の頃に見た風景が失われていくのは悲しくなります。でも、心が安らぐときもあります。それは、毎日のように聞こえてくるキジの鳴き声です。ある日、鳴き声に気づき外を見ると畑の中でオスのキジが鳴いていました。すると、周りの草むらからメスのキジと子供が出てきたのです。きっとキジの親子で、オスが危険がないかを知らせているのだと思います。わずかに残った草むらの中でキジが生きているとわかったとき、改めて緑の大切さに気づかされました。

町の発展のためには、科学技術を取り入れ近代化を進めていくことも必要です。しかし、受け継がれる伝統や豊かな自然を守っていくことも大切ではないでしょうか。緑が無くなればキジや生き物の生きる場所も無くなるのです。私たちが住みやすい町ならば生き物にとっても住みやすい町だと思います。そして、限られた自然の中で人と生き物が共存して生きていく、そういう町であり続けてほしいと私は思います。

ぼくらの町のもみの木公園

取手市立宮和田小学校 三年 間 下 拓 海

「ただいま。遊びに行ってくる。」

ぼくは、学校から帰ってランドセルをおくとすぐ、家の近くにあるもみの木公園に遊びに行く。公園の真ん中にはもみの木があり、遊具はすべり台やブランコぐらいしかない小さな公園。でも、そこに行けば、いつもたくさんの友だちがいて、時間がたつのもわすれて、あせだくになって遊んでしまう。

もみの木公園にいるのは、友だちだけじゃない。ぼくたちのためにいろいろなイベントを考えてくれる本谷さんという自まんのおじさんがいる。三月には、おうちでかざらなくなつたひな人形をあつめ、おじいちゃんやおばあちゃんたちといっしょにかざって、公園でおいわいをした。夜はおひなさまをライトアップして、とてもげんそうてきた。五月には、みんなで遊べるむかしの遊びを教えてください、公園は子ども天国に早がわりする。八月には、ながしソーメン大会をしてくれた。あつい中、みんなで食べたソーメンはかくべつだった。十二月には、もみの木やフェンスにイルミネーションをつけて、夜はまほうのせかいになる。本谷さんによると、きれいなだけでなく、はんざいのぼうしにもなるそうだ。また、本谷さんは、公園のそこにある地しんや火事の時に使う用具

のことを何でも知っていて、使い方を教えてくれたりする。本谷さんだけではない。近くに住む人たちも、ざつ草をぬいたり、すなをはいたりして、ぼくたちがあん全に遊べるようにしてくれる。この前、友だちといっしょに、ぼくも草ぬきやじやりそうじなどをした。きれいになった公園を見たら、いい気分になった。

ぼくは、この公園と本谷さん、近所の人たちが大好きだ。だから、いつまでも気持ちよく遊べて、みんながいつでもあつまれるように、これから、公園を大切に使い、そうじも自分からがんばってやっていこうと思う。

歴史を感じる場所、瓜連

那珂市立瓜連小学校 六年 正 田 真 優

私の住む瓜連には、歴史を感じられるものがたくさんあります。

私の家から歩いてすぐのところには、下大賀遺跡があります。この遺跡は、国道一一八号線の下など、瓜連の広いはんにわたってあり、この道路の車線を増やすための工事などで、ここ数年、どんどん発掘が進んでいます。

初めのころは、茶色の土が見えたり、穴があったり、いったい何だろうと不思議に思っていました。遺跡の発掘体験をする機会があり、家族で参加しました。私は父と、土器のかけらや、鉄のくぎのようなものを見つけてことができました。

この遺跡の調査で、なんと旧石器時代から江戸時代までの時期を、人々が過ごしていたことが分かりました。歴史年表などで見ると、とても長い時間であることが分かります。

出土したもので、特に貴重なのは、奈良時代の竪穴住居から出土した須恵器のさかずきです。このさかずきには、「永」としゅしよがされていましたが、実はしゅずみで書かれた土器は、県内でも六十点ほどしか出土していません。しかも、それだけではありません。このさかずきが二つも見つかったのです。私はこれを知ったとき、下大賀遺跡にはめずらしいものが二つもあるの、とおどろきました。

私は、歴史の中でも、一番戦国の世に興味を持っています。その時代にも、ここで人々が暮らしていたのかな、ここで戦が起こったりしたのかな、私の好きな武将も、この土の上を歩いたりしたのかなと、いろいろな想像をすると、とても不思議な気持ちになってきます。

私の父が通っていた保育園は、瓜連城のあとに建っているそうです。私は、最近このことを知りました。この城は、戦国時代の少し前になる南北朝時代に築かれたもので、戦国時代の城と比べると、縄張りなどの工夫はあまり見られませんが、土塁や空堀はとてもきぼが大きく、しかも良い状態で残っているそうです。城を建てる技術があまりなかった時代に、これだけのものを築けたということは、その当時も多くの人がこの地に住んでいたのだろうと思います。

遺跡があったり、お城があったり、昔からこの瓜連は住みやすい所だったのだろうと考えると、とてもほこらしい気持ちになってきます。

これからも、この瓜連を大切にしていきたいです。

桜咲く里

桜川市立岩瀬西中学校 二年 荒木優作

僕は栃木県との県境にある桜川市（旧岩瀬町）に住んでいます。南に筑波山、北に富谷山があり、特に富谷山には、歴史ある富谷観音があり、岩瀬の町を見守っています。そんなのどかな町は、かつて石材業で栄えていましたが、外国からの輸入石材におされて、町にはやめてしまった後の建物が目立っています。

そんな状態ですが、この町には、じまんの場所があります。それは、桜川市磯部にある磯部桜川公園です。

磯部桜川公園は、文字通り、桜の公園なのですが、かつて桜川の桜は、「西の吉野、東の桜川」と言われるほどの桜の名所で、平安時代の歌人、紀貫之が

「常よりも

春辺になれば桜川

波の花こそ

間なく寄すらめ」

という句を詠んでいます。現代語に直すと、

「春になると桜の花びらが川面をおおって流れていく。少しの間も空くことなく、壮観な眺めだ。」

となります。さぞかし、見事な桜だったことでしょう。また、室町時代には、有名な世阿弥が桜川を舞台とした「謡曲 桜

川」がつくられました。今でも地元の和菓子屋さんでは「謡曲もなか」が販売されていて、桜川の名物となっています。「謡曲 桜川」がつくられたのち、江戸時代には、水戸黄門としても有名な徳川光圀が、この地の桜を大変気に入って、桜を水戸の見川川沿いに植え、見川川の名前を桜川に変えてしまうほどだった、とされています。

それほどまでに有名だったはずの桜川も、今では茨城県内の人でさえ、桜川の桜のことは知らず、桜川市の名前も分からないという人がかなりいます。昔は、あれほど人気だったというのに。

しかし、有名ではなくなってしまっても、桜川の桜は、毎年見事な姿を見せてくれます。

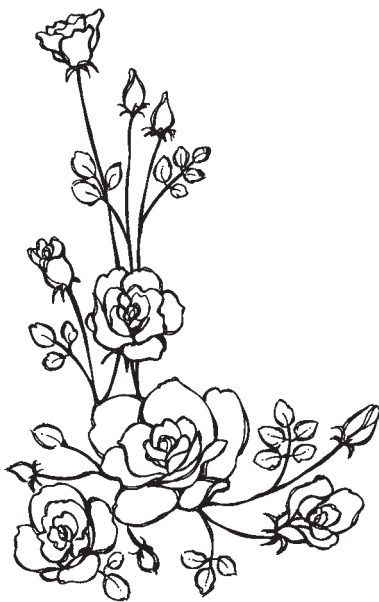
現在、桜川の桜は、天然記念物として保護されており、磯部桜川公園には十一種五百本の山桜が、また、近くにある高峯には、数千本もの山桜が自生しており、岩瀬の春の風物詩となっています。

ですが、明るい話題ばかりではありません。現在生息している山桜は、なかなか健康とも言えない状態が続いており、この先枯れてしまうのではないかと心配されていますが、少し前について天然記念物の桜のうち一本が枯れてしまいました。残っている桜も良い状態ではありません。気を抜いていると、全滅してしまう可能性があります。僕は、ただただ、心配です。

ですが、地域で桜を守ろうとする動きも活発です。例えば、「サクラサク里プロジェクト」によって、植樹や、地域の子どもへの特別授業を行うなどをして地域全体で桜を守る動き

を広げようと、がんばって活動しています。それだけ、地域の人々からの桜川の桜への思い入れが強いのです。

自然に囲まれた町、桜川。そして桜咲く里、桜川の一人の住人としてこの町のシンボルである桜を大切に、桜川でのくらしを楽しんでいきたいと思っています。



ふるくてあたらしいわたしのまち

つくば市立桜南小学校 一年 桑 田 咲 月

わたしがすんでいるいばらき。はなびたいかいやクリスマスかい、大がくのおんかさいなど、いろいろないいところがあります。そのなかでもわたしがとてもいいとおもうのは、みつつです。

ひとつめは、ふるいものをだいじにするやさしさです。がっこうのおはじきやおはじきばん。それってむかしはもっていつてつかつたと、おかあさんにききました。けれどもいまは、そつぎようせいのががっこうにおいていつてくれたおはじきやおはじきばんを、かりてつかつています。わたしはわすれものをするしんぱいがすこしへりました。おかあさんもおはじきをかわなくてすんで、よろこんでいました。

ふたつめもまたがっこうのことですが、おとながこどものためにがんばつてくれることです。むかしはなかつたかもしれないあさのえいごのじかんやよみきかせのじかんがあります。それはおかあさんたちがボランティアできてやつてくれるやさしさでもあります。これはわたしのしょうがっこうだけじゃなくかもしれない。もしわたしのしょうがっこうだけじゃなく、あつたかもしれない。もしわたしのしょうがっこうだけじゃなく、あつたかもしれない。もしわたしのしょうがっこうだけじゃなく、あつたかもしれない。

そしてみつつめは、あたらしいものをつくつていくちから

です。たとえば、プラネタリウムはいくたびにやるものかわつて、まいかいわくわくします。それに、へやのなかでみるほしがゆめのようにきれいなので、わたしはなんかいいみてもあきません。とくにせいぎのことがおはなしでくわしくせつめいされるプログラムがすきです。

こうしてすごしていて、ときどきおもうのです。いばらきって、ふるいものもあたらしいものもだいじにしていつてつてもすてきなまちだな。そうおもうたびにいばらきがすきになつていきます。

ぼくとおかあさんのとつておき

坂東市立岩井第二小学校 一年 落 合 凱 飛

「かいとくんのすんでいるところってなにもないね。」

とうきょうにすんでいるともだちがあそびにきたときにいわれた。

たしかに、ぼくのすんでいるまちには、でんしゃもおつていないし、大きなショッピングモールもない。「そんなことないよ。」つていいかえしたかつたけれど、ことばがでなかつた。

いえにかえつてから、ばかにされたのがくやくして、おかあさんにどなった。

「なんでもうちは、こんななにもないとすんでいるの。もつとべんりなところがよかつた。」

すると、おかあさんは「でかけるから、おいで。」とだけいつ

て、くるまにのつた。

ついたところは、川ぞいの、みわたすかぎり田んぼがひろがるばしょだった。

なつのあつきたいようがギラギラして、つよいひかりがいねのみどりをキラキラとひからせた。とつてもきれいだつた。そして、おかあさんがいった。

「おかあさんも、いちどはほかのところへすんだんだよ。でも、とてもいきがつまつた。このけしきはね、おかあさんのとつておきなんだよ。大きくいきをすいこむとエネルギーがもらえるかんじがするしね。」

そうか！ぼくのすんでいるまちには、こんなにもすばらしいたからものがあるんだ！どこまでもひろがるみどりいろいろじゆうたんは、ぼくのとつておきになった。

こんどともだちがあとびにきたら、いつてやるんだ。「ぼくのすんでいるところには、『とつておき』があるんだよ。」って。

そして、おかあさんとぼくのとつておきのこのけしきをみせてやるんだ。

おぼんのおむかえちようちん

石岡市立石岡小学校 二年 中 島 琉 夏

わたしがすんでいる地いきでは、おぼんの八月十三日におはかへご先祖様をおむかえに行く「おむかえちようちん」という行じがあります。お盆の間だけご先祖様を自分の家につれてくるのです。

十三日は、皆で盆だなを作ります。仏だんの中に入っているご先祖様の名前の書いてある「位はい」を出してみがきます。おばあちゃんから「ていねいに、きれいに心をこめてね。」と言われました。

おじいちゃんも、家にかざつてあるご先祖様の写真を見ながら、「今みがいている位はいは、琉夏のおばあちゃんのお母さんので、おじいちゃんがみがいているのは、そのまた前のおじいちゃん。」と教えてくれました。

なんだか会ったことはないけれど、どこかで会ったような気がして、うれしい気持ちになりました。

盆だなは、家の床の間の部屋に作ります。どの家でも、ご先祖様を一ばんいいへやにおむかえするのだそうです。

夕方少し暗くなつたころ、どこの家もちようちんを持ってお墓まで歩いておむかえに行きます。

お墓までの道はちようちんの明かりで、あっちでも、こっちでも「ほたる」がとんでいるようでとてもきれいです。

途中で、すれ違う人に会うと、だれも「こんばんは」とあいさつをします。知らない人でもあいさつをします。でもか

ならず「こんばんは」と言ってくれます。皆、親せきか、知り合いのようで、うれしい気持ちになります。地いきの人の温かい心を感じます。

お墓から家の盆だなまで、ろうそくを消さないようにしてご先祖様をおむかえます。

十六日の送りの日まで、ご先祖様にたくさんお供え物をし食べてもらいます。今も昔もずっと続いているお盆の行事です。

いばらきのほしいものみりよく

ひたちなか市立長堀小学校 二年 高橋 英之

ほしいも、それはぼくがとてもすきなものの一つだ。なぜすきかと言うと、あまくてやわらかく、どくとくのしよつかがあり、とてもおいしいからだ。一どたべはじめると、とまらない。家ぞくもすきなので、「なんまいたべたの?」ときょうそうしながらたべている。

いばらきは、ほしいもの生さん日本一だ。その中でもひたちなか市は、多くをしめている。ぼくのすんでいる町のまわりにもたくさん畑がある。通るたびに、そのせいちょうをたのしみしている。

ほしいもにつかわれるいもには、色んなしゅるいがある。お店によくならんでいるのは、紅はるかだ。色がきれいでおいしそうだ。お母さんが、「い前は、玉ゆたかと言うほしいもが多かった。」と言っていた。玉ゆたかの色は暗いので、

色が明るい紅はるかが人気なのかな、と思った。

形も細くて長いひらほし、いものかたちそのままの太くて丸い丸ほし、切れはしの切こうがある。切こうをもらうこともあるが、じゅう分おいしいのでおやつにピッタリだと思う。パンやさんでは、ほしいもをつかった「ほしいもロール」、おかしやさんでは、「ほっしーも」と言うものがある。どちらもおいしい。

ほしいもをおくりものにするのと、「自ぜんのあまみであきずにたべられ、おいしい。」と、みんなよろこんでくれる。あまくておいしく、体によいほしいもを世界中の人に知ってもらい、たべてもらいたい。

わたしのすむ町

東海村立白方小学校 二年 齋藤 陽和花

わたしのすむ東海村には、たくさんの子どもの会があります。わたしは村まつきたキラキラ子ども会に入っています。キラキラ子ども会は、ちいきのおじいちゃんたちが中心になつてかつどうないようをきめてくれています。わたしたちが、色いろなたいけんを安ぜんにたのしくできるように、一生けんめい考えてくれています。今年の夏は、キャンプナイトに、おみこし作り、キャンプをきかくしてくれました。毎日のラジオ体そうもあります。キャンプやおみこし作りではみんなですうだんして、くふうをしながら作りました。おじいちゃんたちは、ちえをたくさんもっているのです、とてもすてきな

ものができあがりしました。子ども会は、ちがうクラスの人や上きゆう生、ちがう学校の人など、いつもはバラバラで一しょにいられない人もたくさんいるので、同じことをしてあそんだり、協力して作ひんを作ったりするのともうれいいです。キャンドルやおみこしのざいりよう、キャンプのときのごはんのざいりようなどは、おじいちゃんたちがわけて買ひに行つてくれます。わたがしきやポップコーンきもかりに行つてくれます。わたしは、たいへんそうだなあと思ひますが、おじいちゃんたちはいつもたのしそうです。

あきには、三せだいこうりゆうがあり、ふゆには、クリスマス会があります。三せだいこうりゆうでは、きよ年はみんなでけんちんそばを作つてたべました。クリスマス会ではまゐ年プレゼントこうかんをしたり、ケーキ作りをして、どのチームのケーキがばんかコンテストをします。わたしは、今からドキドキワクワクしています。子ども会の人たちのおかげでたのしみがあふれています。キラキラ子ども会は、みんなのえがおがキラキラです。

わたしの大好きな海

日立市立大沼小学校 三年 小 泉 こころ

わたしが生まれ育つた日立市は海に面していて、小さなころから何度も遊んだ海はわたしにとって大切なたから物です。夏になると多くの海水よくの人たちでにぎわい、花火大会も開さいされます。はまべにすわり、ま上にうち上げられ

る花火を家族でみるのが、夏休み一番の楽しみになります。

わたしのひいおばあちゃんは、大はく力でとてもきれいな花火が苦手だそうです。ひいおばあちゃんは今のわたしと同じ年くらいでせんそうをけいけんしています。

わたしは、小学一年生の時に読んだ本をきっかけにせんそうについてきよう味を持ちました。せんそう中の日立市を調べてみると、わたしの大好きなこのまちも大きなひがいをうけたことがわかりました。

当時、日立市にはせんそうで使用するぶきなどを作る工場がたくさんあつたので、その工場がねらわれたのです。

一九四五年の六月一〇日と七月一九日に空しゆうがあり、七月一七日にはかんぼうしゃげきを受けて多くの人がぎせいになり、住んでいた家を失いました。家族や友達を失った人もたくさんいたと思ひます。考えただけでもとてかなしい気持ちになります。

小さなころにけいけんした空しゆうや、かんぼうしゃげきのこわい記おくを思ひ出してしまふから花火は今でもこわいと、ひいおばあちゃんは言ひます。

今、わたしが住んでいる日立市の海はとてもきれいでおだやかです。夜、ねる前に目をとじると波の音がきこえてくることもあります。そんな時わたしは、今は本当に幸せなよの中なのだとあらためて思ひます。

せんそうについて勉強をしたことで、平和とは何か少しわかつたような気がします。

すてきで平和な日立の海をおばあちゃんになつてもみてい

たいと心から思います。

わたしの感じたゆうき市

結城市立江川南小学校 三年 一ツ木 夏 凜

わたしは、六さいの時にいばらき県に引っこしてきました。わたしがゆうき市に住んで感じたことがあります。

それは、近所の人たちとなかがいいことです。引っこしてすぐのころ、通学路を歩いて帰っていると、畑仕事をしているおばさんが、

「かりんちゃん、おかえり。」

と声をかけてくれました。わたしは家ぞくいがいから、おかえりと言われたことがなかったので、とてもおどろきました。それと同時に、うれしい気持ちになりました。家に帰ってからお母さんに話すと、

「この地いきの人たちは、どこの子でも自分のまごのように大切に思ってくれているんだよ。」

と教えてくれました。私はそれがうれしくて今では自分から、「おばちゃん、ただいま。」

と、手をふってあいさつをしています。

また、近所の人から、とれたての野菜をもらうことや、私のうちでとれた野菜をとどけることもあります。おかげで、一年中いろいろなしゆんの野菜がいつも家にあります。田植えやいねかりを手つだったり、畑仕事をたすけ合うこともあ

るそうです。私は、この地いきのやさしい人たちが大好きで

す。

わたしは、これからもいばらき県に住むと思います。いばらき県は、何も無い、つまらないと言われていますが、私の住む地いきのような、あたたかい人たちや地区があることをたくさんの人に知ってほしいです。今はまだ、いばらき県のことには知らないことばかりですが、もっと勉強をして、いばらき県のいいところをたくさんさがしたいと思います。そして、もっともつとみ力あるいばらき県にしたいです。

ぼくの住むまち

北茨城市立精華小学校 三年 小松崎 奏 吾

ぼくは、海が好きだ。だから、休みの日にはお父さんといっしょによく海に行く。波うちぎわまで行って、ぬれずにどれだけ近づけるかを勝負して遊んでいる。ときどき大きな波がきて、ぬれそうになる。それをかわしてにげるのがとても楽しい。シーグラスさがしも楽しい。とう明や白いきれいな物を見つけると、とてもうれしい。拾ってきて玄関にかざった。

海はきれいで楽しい所だけど、こわいものにもなる。それは、津波だ。ぼくが一才になるころ、東日本大しんさいが起きた。ぼくの住んでいたアパートには津波がきた。ぼくは覚えていないけど、家の中にも水が入ってきたそう。お父さんとお母さんは、赤ちゃんだったぼくを連れて、市役所にひなんした。今、そのアパートの近くには、ぼうちようていができている。津波からまちの人を守るためだ。道路から海が

見えなくなってしまうから少しさびしいけれど、みんなを守るためだから仕方がない。津波で家がこわれたり、だれかが亡くなったりするのは、もういやだ。ほうちようていは必要なのだと思う。津波の話の聞くところくなる。でも、やっぱりぼくは海が好きだ。

「家の二階のまどから、海が見えるのよ。」とお母さんが言った。

「えっ、本当？知らなかった。」

ぼくは二階のまどから海を見た。朝、天気の良い日には遠くにキラキラ光る海が見える。くもりの日は、空と海のさかい目がなくて、つながっている感じ。夕方は見たことがないから、今度見てみよう。いろいろな色の海を発見できたらうれしい。

青い空とかがやく海、白い波、砂浜、このまちには、ぼくの好きな自然がある。きれいな海を守るような大人になりたい。そしてそのすばらしさをみんなに伝えたい。

緑の多いぼくの町

つくば市立みどりの学園義務教育学校 三年 関根 壮良

ぼくは、ビルがいつぱいのまちからつくば市に引っこしてきました。

つくばは、トトロの森みたいに緑がゆたかで、森や畑・田んぼがあつて、ぼくの大すきなこん虫がたくさんいます。今年の夏は、チョウのオオムラサキ、カラスアゲハ、ナガサキ

アゲハをゆかりの森でつかまえました。その時は、気分がワクワクして楽しかったです。

近くにあるつくば山は、全国でもゆう名な山で、おじいちゃん、おばあちゃんと家ぞくみんなで登りました。ちよう上は、空気がきれいで、空が広くてたくさんのおニヤンマがとんでいました。

ぼくの家では、夜になると虫の音楽会が始まります。となのりの空き地には、エンマコオロギ、ケラ、マツムシ、スズメシがいて、きれいな音色が聞こえます。空を見上げると、星がよくみえて、春夏秋冬きせつごとの星ざが楽しめます。ねる時にカーテンをあけて、虫の声を聞きながら星ざをさがしていたら、夏の大三角形を見つけてきれいだなと思いました。近くに住むおばあちゃんの家は、花火やバーベキューができて、畑にはミョウガやふきのとう、シソ、タケの子、ブルーベリーが生えています。あまりすきな野さいじゃないのに、なぜかどれもおいしくてパクパク食べられるのがふしぎです。新せんだからかなあ。

ぼくのすむ町つくばは、こんないろいろな体けんができる町です。今もどんだん人口がふえて家があちらこちらにたつてきています。緑がへつて虫がへつてしまうかもと、少し心配しています。ぼくが大人になっても、緑はそのまま、発てんしてほしいです。

そして、みんながえ顔でいられるような明るい町になっていてほしいです。そのために、ぼくも朝から元気にニコニコで、緑のトンネルをぬけて学校に行こうと思います。

大すきなわたしの町、筑西市

筑西市立鳥羽小学校 三年 穂積里紗

わたしの住んでいるところは、筑西市です。筑西市には、自まんでできるものがたくさんあります。わたしはその中で、明野のひまわりと、下館のぎおんまつりがすきです。

明野のひまわりは、広い畑一面に黄色のひまわりがさいて、とてもきれいです。おくに筑波山がみえるので、ひまわりの黄色と筑波山のむらさきがよく合っていて、とてもきれいです。近くまで行くと、自分の身長よりも高いひまわりにびっくりします。このひまわりは、夏のはじめにたねをまいて、夏の終わりに花がさくまで大切に世話をします。筑西市の人だけでなく、いろいろな人に見てもらいたいのです。

下館のぎおんまつりには、毎年たくさんのおみこしが出ます。その中でも、かつぐみこしでは日本で一番大きいといわれる「平成みこし」が、見ごたえがあります。わたしは生まれてからずっと筑西市に住んでいるけど、今年はじめて下館ぎおんまつりに行きました。たくさんあるみこしのなかでも、「平成みこし」はとくべつに大きくて、こわいくらいです。たくさんの人でかついでいても、重いのが伝わってきます。

下館ぎおんまつりは四日間つづきます。さい後の日は、市内を流れる川におみこしごと入ります。人のかけ声、水しぶき、見ている人のかん声、全部がまじってすごい力はく力です。大きいみこしから、小さい子供みこしまで、いろいろな地いさのおみこしがあつまって、下館の町が一年で一番もり上が

ります。

他にも、筑西市には自まんでできるものがたくさんあります。お父さんやお母さんに聞くと、わたしが行ったことのないすてきな場所もたくさんあって、行ってみたいと思います。これから、筑西市のすてきな場所にたくさん行って、大すきな筑西市をみんなに教えてあげたいです。

人とのふれあいを感じられる町

取手市立桜が丘小学校 四年 菊地花音

私が住んでいる桜が丘という場所は、春になると道路ぞいや公園のいたる所に桜の花がきれいにさきます。桜の木にかこまれているので、まさに桜が丘という名前がぴったりだなと思います。

私は桜の花が大好きなので、この地いきの名前も気に入っているし、桜がさきほこる時期はともわくわくします。

毎年近くの川ぞいで家族でお花見をしたり桜がまん開の公園で友達とおべん当を食べたり遊んだりしています。私の家の前の公園にもりっぱな桜の大木が広がっているので、その時期、私の部屋はお花見の特等席になります。

この町にはお父さんの仕事の転きんで、私は一才の時に引っこして来ました。

桜が丘は私のお父さんが子供のころに育った場所です。なので、お父さんの通っていた小学校や遊んでいた公園は、今の私の通っている学校であり、いつも遊んでいる公園なので不

思ぎな気持ちになります。

毎年夏休みには、桜が丘夏祭りがあります。このお祭りはお父さんが子供のころから続いていて、今も地いきの人達が協力し合ってもり上げられています。

自治会の各はん長が毎年屋台を運営していて、焼きそばやソーセージ、飲み物などを買うことができます。屋台に立っている人たちは近所のおじさんやおばさん、友達のお父さんやお母さんなので、買い物しながら話をするのが楽しいです。

他にもスイカわりやカラオケ大会、ほんおどりなどもあって、毎年友達と夜まですごせるので夏休みの良い思い出になります。

お祭りごとといえ、冬にはどんど焼きというイベントがあります。どんど焼きは毎年お正月、各家にやって来ると言われるほう作や幸せをもたらす神様が空へ帰って行くのをお見送りし、む病息災や家内安全などをねがう行事です。

やぐらを組んで火をつけ、お正月かざりやおふだなどをもやします。しの竹にさした紅白のおもちを火であぶってから食べると一年間けんこうですごせると言われているので、私も毎年友達とさん加しています。

毎年引きつがれている行事にきせつを感じながらさん加できたり、友達や地いきの人達と関わる事ができるのはとても楽しいです。

私はまだ九年ほしか住んでいませんが、これからもっとこの町の良い所をさがしていきたいです。

私の住む町のお祭り

ひたちなか市立東石川小学校 四年 熊谷 桜子

私の住む町では、八月の中旬にひたちなか祭りが毎年行われています。ひたちなか祭りは花火大会や山車やダンスパレードが開催され、たくさんの方が参加します。

私の住む地区の子供会では、毎年地域の人たちと一緒になつて山車引きや祭りばやしの演奏でお祭りを盛り上げていきます。一年生から三年生までは山車引きに参加し、四年生から六年生までは山車の上で太鼓の演奏をします。山車の上に五人から六人の小学生と、地区の大人の方が乗って、大人の方たちは大太鼓や横笛を演奏し、私たち小学生は小太鼓を叩いて祭りばやしを盛り上げます。

私は今年初めて太鼓の演奏に参加しました。太鼓はただ叩けばいいというものではなく、きちんと叩くリズムがあり、叩き方で曲も変わります。

その太鼓の曲を教えてくださいましたのが、近所で衣料品店を営んでいる小池さんです。小池さんは小学校の陣太鼓指導もしているベテランの方です。

練習は夏休みに六回行われました。練習の前に太鼓の曲の書いてある楽譜をもらいました。音楽の楽譜とは違い、太鼓の楽譜は見たことのない丸や三角の記号で作られています。習う前は「これなんだ。」「この記号はなんだらう。」と声が上がっていました。でも、小池さんは優しく丁寧に教えてくれたので、すぐに楽譜の意味を理解することができました。

た。上手に出来たときはほめてくれるので、みんな一生懸命練習にはげみ、上手になっていると自分でも感じる事ができました。

四回目の練習からは一番長い曲を一人ずつ叩く練習が始まりました。みんなの前で叩くのは心臓が飛び出そうなくらい緊張するのでちゃんと出来るように順番が回ってくる間に何度も指で太鼓の練習をしました。練習の甲斐があり、練習本番では一度も間違えずに叩くことが出来ました。その日の練習後に練習を見ていたお母さん達に「上手だね。」「四年の中で一番上手だと思うよ。」と言われました。私はすこし照れてしまいました。

ひたちなか祭り当日は祭りのはつぴを着て太鼓を叩く順番が来るまで低学年の子供達と一緒に山車を引きました。山車を引いている間も、本番のことを考えると胸がドキドキして、居ても立っても居られない気持ちでした。

いよいよ私の番がきてだしのりこもうとすると、周りの大人の人が「頑張ってるね。」と声をかけてくれたので、緊張はしたけれど、頑張って演奏しようと思いました。山車の上では二曲演奏しました。少しだけミスをしたけれど、みんな太鼓を叩く時の音色はとてもきれいで、みんなから「盛り上がったね。」と声をかけられ、嬉しい気持ちでいっぱいになりました。

私はまた来年もひたちなか祭りに参加し、みんなと笑顔いっぱいを楽しみたいです。

私の育った町江戸崎

稲敷市立江戸崎小学校 四年 平 山 陽 菜

私の住んでいる江戸崎には自然がたくさんあります。だからたくさん生き物がいます。秋にはとんぼがたくさんとんでいます。ザリガニなどもいます。夏になるとかぶと虫やクワガタもたくさんつかまえることができます。お外に出れば、さまざまな生き物に出会えるので私はいつもそれを楽しみにしています。

その自然の中で私は家族と色々な種類の野菜を作っています。トマト、きゅうり、じゃがいも、なす、ピーマン、とうがらしなどを育てています。種や苗を植えて、水をあげたりひりょうを加えて、手間をかけて野菜ができたときはとてもうれしいです。しゅうかくした野菜はサラダにしたり、おみそしるに入れたり、天ぷらにします。それを家族みんな「おいしいね、おいしいね。」

と話しながら食事をする時間が私は大好きです。そんなたくさん野菜が育てられるのも自然にかこまれた江戸崎という町のおかげだと思います。

江戸崎には、昔からある商店がいがあります。そこにはおまんじゅう屋さんやパン屋さんなどたくさんのおいしい食べ物屋さんがあります。商店がいて私が一番好きな食べ物はお肉屋さんのコロッケです。ぜひみんなにも食べてほしいです。それから商店がいには笑遊館という、みんなが集まるにぎやかな場所があります。そこでは、こいのぼりマルシェや豆

まきめぐりなど色々なイベントが開かれます。私も何度かそのイベントに参加してとても楽しい思い出作りをしました。

そして江戸崎には、絶対に欠かせない行事が二つあります。一つ目は八月に開さいされる江戸崎花火大会です。音楽に合わせてたくさんの種類の花火が打ち上がります。江戸崎の花火大会は、この町のみんが楽しみにしているイベントです。花火大会の会場から私の家はとても近いのでしんせきがみんな集まってバーベキューをしながら花火を見ます。それが私の夏の一番の楽しみです。

二つ目は江戸崎ぎおん祭りです。たくさんの出店があったり、江戸崎小学校のお友達と会うことができたり楽しみがいっぱいです。そのお祭りの中で一番の見所は商店がいの真ん中で山車がぐるぐる回る分廻しのひろうです。たくさんの山車がたいこや笛に合わせて人の力だけでもものすごい勢いで回ります。とても迫力まんてんです。

まだまだ江戸崎のおいしい物や、楽しい場所はたくさんあります。私たちの登下校を見守ってくれるやさしい大人の方たちもたくさんいます。私はそんな江戸崎が大好きです。

私はこの町のために落ちていくゴミを拾ってきれいな町にしていきたいです。

土浦全国花火競技大会

土浦市立都和小学校 五年 和地 夏希

わたしは、生まれも育ちも茨城県です。住んでいる所は土浦市です。

わたしは、土浦の有名な花火大会について書きたいと思います。都道府県みりよく度ランキング最下位の茨城県ですが、茨城県にこんなすてきな花火大会があると知れば、ランキングが上がると思ったからです。

この、土浦全国花火競技大会は、日本三大花火大会の一つで、一九二五年から始まり、今も続いている歴史あるすばらしい花火大会です。スターマイン、十号玉の部、そうぞう花火の部と三つの部門で競われていて、総合ゆう勝者には、内かく総理大臣賞が授与されます。

この花火を見るために、さじき席という花火を間近で見られる席があります。このさじき席は、一度は行って見るといいと思います。

その理由は、心ぞうにまでひびく花火の音、夜空いっばいにさく色とりどりの花火、火薬のにおい、目や耳、体全身でこの花火を感じられるからです。すごく感動します。

花火大会と聞くと、夏のイメージがあるけれど、土浦の花火大会は十月。秋に行なわれます。少しはだ寒く、秋の思い出を感じる中、花火を見るといふ他では体験できないきちよな花火大会です。

わたしは、音楽に合わせて連続で打ち上がるスターマイン

とそうぞう花火が好きです。

スターマインは何十発も続けて打ち上がり、花火が空からたきのようにふつてくるように感じ、とてもきれいです。

そうぞう花火は、ハートや動物の形などの花火が打ち上がり子どもが見ていても楽しいです。

たくさんの花火しさん達やスタッフさん達土浦市民みんなのおかげで土浦の歴史ある花火大会が行われています。

わたしは、歴史もあり、見ても楽しい土浦の花火大会が、これからもずっと続いてほしいと思っています。わたしの作文で土浦の花火大会のみりよくが伝わり、都道府県みりよく度ランキングのばん回につながってくるとうれしいです。

伝統あるわたしの町

ひたちなか市立那珂湊第三小学校 五年 網代彩葉

わたしの住む町ひたちなか市那珂湊地区には、たくさんの伝統があります。

わたしは学校で郷土芸能クラブに入っています。そのクラブでは、三びんぼんおどり、大漁ぶし、おっしゃいというものを習います。それらを発表するためにおどりや太こを中心に歌、かね、しゃみせんの練習をしています。

三びんぼんおどりは、那珂湊地区のぼんおどりです。夏休みに毎年学校で行われる夏祭りで発表するために一学期に練習をしました。やぐらのまわりでおどるのは、練習では味わえない楽しさがありました。

大漁ぶしは漁しさん達が「大漁を願って歌った曲です。おっしゃいはお祭りなどでよく歌われる歌です。大漁ぶしは秋にある集会で発表するため二学期に練習をし、三学期は三びんぼんおどりと大漁ぶしの復習、おっしゃいを練習します。

わたしは今特にしゃみせんの練習をがんばっています。とてもむずかしくて大変ですが、少しずつできていくのがうれしいです。一年間を通してこつこつ練習をするので、達成感と楽しさがあります。伝統あるものを習うことで地域の歴史を感じる事が出来ています。

わたしの町には七百年以上の歴史があるお祭りがあります。それは、はつきく祭りです。

はつきく祭りは昔、海の神様をまつたことから始まったと言われています。以前は毎年行われていましたが、今は二年に一度になり、今年は盛大に二日間行なわれました。

各町のこせいある山車が町をねり歩きます。山車には歌い手と太こや笛を鳴らす人が乗っていて、着ているものも各町ごとの特ちょうがあり、とてもはなやかです。山車の中にはささらとよばれるあやつり人形のようにおどる三びきのししや、みろくとよばれる三体の神様の人形をのせたものもあります。

わたしの住んでいる地区には山車がありません。だから友達と住んでいる町の山車を引かせてもらいました。何十人も大人と子供が力を合わせて山車を引きます。登り坂などはより大変になりますが、みんなで声をかけて登るのでとても楽しく感じます。えん道の人の声もとても力になります。

このようにわたしの住む町には、人びとに長年うけつがれ

てきた文化があります。これからわたし達もそれを大切に守っていき、今後も長く伝統が続くようにしていきたいです。

大好きな常陸大宮市

常陸大宮市立大宮小学校 五年 益子成美

私の住んでいる常陸大宮市は、久じ川と那珂川が流れ、緑豊かな環境に恵まれていて安全で快適な所です。私はこのまちで生まれ育った事をほこりに思います。

常陸大宮市は、楽しく活気あるお祭りがたくさんあります。私は特に二つの夏祭りが大好きです。一つ目は、ぎおん祭です。今年もお友達と前から計画をたて、とても楽しみにしていました。ぎおん祭は、歩行者天国になり、たくさんのお店が並び、私はクラスの男子が一生けん命おみこしをかつぐ姿を見るのも楽しみの一つです。二つ目は、私の通っている大宮小学校で行なわれている、あきない祭りです。学校の先生が屋台を出し、やぐらを囲んで盆踊りをしたり、ダンス、太こなどの楽しいイベントがたくさんあります。私が一番楽しみにしているのは、デイズニーチケットや商品券などが当たる抽選会です。みんなドキドキしながら、自分の名前が呼ばれるのを願って待っています。残念ながら、今年も当たりませんでした。お友達との良い夏休みの思い出になりました。

私が常陸大宮市で特に好きな場所は、道の駅かわプラザです。直売所には地元常陸大宮産の新鮮な野菜・果物等や、地酒・おまんじゅうなどのお土産品もあります。その他、野菜

の収かく体験が出来る農園やバーベキュー施設、夏には道の駅の横を流れる久じ川で水遊びもできます。私が道の駅で必ず食べる物があります。それはアユの塩焼きです。炭火でじっくり焼かれた香ばしい匂いが食欲をそそり、ふっくらした身がとても美味しいです。

道の駅は、近場の方だけでなく、たくさんのお客さんにも知って欲しいなと思います。

私がこのまちに住み、日々感じる事は地域の人の優しさです。私たちが安全に登下校できるようにと通学路の途中に「こどもを守る一〇番の家」があります。私たちが危ない目や助けを求めたい時に守ってくれる場所です。そして、私たちが学校に行く時に、毎朝笑顔であいさつをしてくれます。雨の日、強風の日、どんな日でも私たちを守ってくれている色々な方々のおかげで、安全に登下校出来る事にとても感じています。

私は、自然豊かで住みやすく、誰もが安心してくらせる、常陸大宮市が大好きです。しかし、少子高れい化が進み、人口が少しずつへってきていると聞きました。私は、今よりもっと活性化し、このまちをたくさんの人に知って欲しいと思います。そして人口が増加して、子供から高れい者、みんなと支え合いながら、にぎやかな常陸大宮市になれば良いなと思います。

ふるさと自まん「菅谷祭」

那珂市立菅谷西小学校 五年 笹島 佳祐

「うわあ!!ぶつかる、ぶつかる。すごい!!入ったよ。」

ぼくは、大声でさけびながら、たくさん拍手した。

菅谷祭は、ぼくが住んでいる那珂市の祭で菅谷地区にある鹿島神社で三年に一度、八月十五日に行われる祭だ。菅谷のちようちん祭大助祭とよばれることもある。たくさんのおうちんをぶらさげた、九台の山車が鳥居の前で神社に入る順番を競い合う。ぶつかりそうになってびっくりした。一緒に行ったお母さんが、子どもの時に見た祭では、山車が本当におぶつかっていたそうだ。山車が鳥居をくぐりぬける所が見どころで、山車をぐるぐる回したり、鳥居にいきおいよくつっこんではぶつかる寸前で止まり後ろに下がりが、方向も直すことをくり返す。鳥居のはばは、広くなって、山車がやると通れるくらい。少し上り坂になっているので鳥居をくぐる時はどの山車もおす人が「せい」のかけ声で夢中でおすから、すごいスピードでけい内に入って行く。ぼくは、一台一台数えながら、ドキドキしながら拍手をした。山車がけい内に入るのは、夜なので何百もの山車をかざるちようちんのあかりがとってもきれいだ。

九台の山車がけい内にそろい、みこしがとう着すると、もう一つの見どころ、「神事」が始まる。神主さんがご神刀でけい内にたかれた火を切ると、七つぼんぼりとよばれる山車を先導して来た七つのちようちんの付いた竹をふりながら

ちようちんを落とす。一番最初にちようちんが落ちた地区がえんぎが良いとされている。江戸時代から、地域の人たちは、この祭で五こく豊じようを願ったらしい。

ふだん夜通るとまっ暗でこわい感じがする神社が、十五日は、昼間のように明るくて、たくさんの人がいてびっくりした。こんなにたくさんのおうちんが住んでいたのかと思った。

ちようちんがたくさんかざられた山車や七つぼんぼりを火に向かってふる神事は、とてもめずらしくきれいなので、ぼくが大人になっても続いてたくさんの人に見てもらいたい。

わたしの住む町

つくば市立荃崎第三小学校 五年 大河内 彩楓

私はつくば市九万坪に住んでいます。近くに、桜が丘団地の地域があり、私のおばあちゃんが住んでいます。桜が丘団地は近くの地域なので、私はこの地域のいろいろな活動に参加しています。

この桜が丘団地には「桜が丘お花会」という会があって、地域で犯罪がおきないように毎日みんなで当番制でパトロールをしています。私のお母さんもパトロールに参加しています。このパトロールのおかげで、あやしい人などが少なくなりました。またお花会では、時々みんなで集まって公園などの草むしりをしたりしています。朝早くから集まるので起きるのが大変ですが、みんなで草むしりをした後はとてもすっきりした気持ちになります。そして、この会にはスーパ

なおじさんがたくさんいます。あるおじさんは、丸太を加工して、おしゃれなテーブルやイスをいろんなところに作ってくれました。桜の咲く時期にはこのテーブルといすに座ってお花見をして楽しかったです。また、別のおじさんは、公園のブランコやすべり台や手すりにペンキをぬってきれいにしてくれました。そして、このおじさんは、公園の周りに花だんを作ってくれたり、自販機を設置してくれたり、また、公園の掃除を手伝うと、ジュースをくれたり、とにかく、楽しくて頼りになるおじさんです。おじさんは、朝の登校のパトロールもしてくれていて、あいさつをするようにみんなに声をかけてくれたりします。最近夏祭りがなくなってしまうけれども、以前はおじさんたちが中心となって、盛大な夏祭りをやってくれました。盆踊りや焼きそばやイカ焼き、ジュース屋などいろんなものが売っていたり、また、手作りの竹馬をくれたり、竹を使った水でつぼうであそべたり、とにかく、楽しいお祭りでした。

このように私の住む地域では、地域をきれいにしたり、また、犯罪が起きないようにみんなが協力したりしています。お花会では、たまにみんなと会っているいろいろなイベントすることで、この地域に住んでいる人がわかり、それで住んでいくことが安心できたりします。この地域のおじさんたちがパトロールや草取り、公園を整備したりと、積極的にしてくれているのは、助け合いの大切さをよく知っているからだと思います。私はこのように、誰に言われたからじゃなくて、積極的に動く姿を見て私も助け合いのすばらしさがよくわかりました。私も大人になったら、おじさん達がしてくれたように、みんな

など協力して、この町をよくしていきたいと思っています。

ぼくの町の自慢、竜ヶ崎線

龍ヶ崎市立八原小学校 六年 工藤賢信

ぼくの住む龍ヶ崎市には、「関東鉄道竜ヶ崎線（通称・竜鉄）」が走っています。常磐線佐貫駅と市内の竜ヶ崎駅を結ぶ単線で、佐貫、入地、竜ヶ崎のたった三駅しかありませんが、実は西暦千九百年に開通した、茨城県で最も古い私鉄です。ぼくは、ゴミ拾いやボランティアなど、地域に役に立つ活動をしてもらえる「まちづくりポイント」を集めて、竜ヶ崎駅の一日駅長を体験しました。ぼくは電車が好きで、駅長や運転士にあこがれていたもので、一日駅長体験をやること決まっています。どんなことをやるのだろうかとうれしく楽しみで待ちきれませんでした。

当日、帽子と制服を着せてもらい、すっかり本物の駅長になった気分では体験をスタートしました。実際に使っている車両を見学し、運転席に座ってドアの開閉や車内放送をさせてもらいました。それから、竜鉄の歴史についても教えてもらいました。竜鉄が開業した西暦千九百年は、今から百十九年も前のことです。日本に初めて鉄道が開通したのは西暦千八百七十二年、そのわずか二十八年後のことです。全国に私鉄が開業し始めたばかりの頃だったそうです。そんな歴史ある鉄道が、ぼくの住む町を走っていることにはぼくは誇りを感じます。

その他、駅のホームで発車メロデーを流したり、ホームの一番目立つ場所に立って運転士さんに発車の合図を送るなど、たくさんの仕事を体験させてもらいました。改札の仕事では、お客さんから切符を預かり、はんこを押して手渡しで返します。今でもこのように改札を行っているのをほくは初めて見ました。他の駅ではほとんどやっていないと、駅員さんが教えてくれました。

先頭車両のエンブレムには「ありがとう平成 ようこそ令和」と書かれています。ほくは、明治、大正、昭和、平成、令和を市民とともに走ってきた竜鉄ならではのことばだと感じ、令和の時代の後もずっと龍ヶ崎を走り続けてほしいと思いました。龍ヶ崎名物「まいんコロッケ」の模型がつりかわの上についていて、まちおこしに一役かっているのも魅力の一つです。

関東鉄道竜ヶ崎線は、一から二両編成の小さな列車ですが、龍ヶ崎の発展と共に成長してきた、龍ヶ崎市民とも仲の良いすてきな列車です。竜鉄は住宅地を抜け、広い広い田園地帯を進んで行きます。その景色は季節によって変わり、お客さんを楽しませ、龍ヶ崎が日本人の食を支えていることを実感させてくれます。一日駅長の体験をさせてもらったおかげで竜鉄の長い歴史を知ることができて、より身近に感じ、もっと好きになりました。このような体験をさせてもらえるのも、ほくの住む龍ヶ崎市の自慢の一つです。

私の町を支える人

牛久市立牛久小学校 六年 北村 千華

「おはよう。」

「行ってらっしゃい。」

「気をつけてね。」

私は、毎朝この声かけを聞きながら登校している。登校途中の大きな交差点に、毎朝ボランティアの方々が入り込んで立っているのだ。暑い日も寒い日も、雨の日も風の強い日も。私の祖父母と同じぐらいの年齢の方々なので、体は大丈夫なのか、無理していないのかと心配になる。でも毎朝元気に笑顔で声をかけて下さり、反対に私たちの方が元気をいただいている。実は、下校の時間帯にも立ってくださっている。しかも、この交差点だけではなく、牛久市内の危険な横断歩道や、交差点には、緑のベストを着用したボランティアの方々が必要立ってくださっている。本当にありがたいと思う。

そのボランティアの一人に、私が住んでいる刈谷町の区長さんがいる。毎朝交差点に立ってくださっていることもあり、そこを通る私たち全員のことを覚えてくださっている。運動会や感謝祭などの行事の時には、区長として学校に招待されるので、その時に写真を撮って、私たちにプレゼントしてくれる。姉は、小学校を卒業した後、中学校の入学式の写真をプレゼントされた。私たちにとって思い出となる貴重な瞬間をカメラに収めていただけるのもうれい。地域の子どもたちの成長を見守ってくれている、おじいちゃんのような存在だ。

近所に、一人暮らしのおじいさんがいる。そのおじいさんは、よく歩道のアスファルトの割れ目から生えている雑草をとっている。自分の家の前をきれいにしているならわかるが、そうではない。そのおじいさんは自転車で近所を見て回り、気になった所があると自転車を止め、その場所をきれいにしているのである。アスファルトの割れ目から雑草が生えている地域は、何となくさびれた町並みに見える。でも、そのおじいさんのおかげで、家の近所の道路はいつでもきれいである。整然とした町並みに見える。この前、友達と遊んでいるときに、雑草をとっているおじいさんを見かけた。私一人の時には、なかなか声をかけられなかったが、友達と一緒にだったので、そのおじいさんにお茶の差し入れを試してみた。すると「ありがとう」と、とてもうれしそうに受け取ってくれた。おじいさんは、どうしてそのようなことをしているのだろうか。誰かに感謝されたいとか見返りを期待して実行しているわけではなさそうである。機会があったら、今度はお礼を言いたい。そして、話しもしてみたい。

私は今、たくさんの方々に支えられている。でも、私はまもなく中学生になる。しっかり勉強して、色々な考え方や感じ方に触れ、視野を広げたい。そして、いつかこの町に恩返しができるような、立派な大人になりたい。

知れば知るほどおもしろい私の街水戸

茨城大学教育学部附属中学校 一年 佐々木 あすか

私の住んでいる水戸は、大自然も無く、奈良や京都のような世界遺産も無く、あまり有名なものがない平凡な街だと思っていました。しかし、去年、今年と自由研究で市内を調べて、少し考えが変わってきました。

私は去年、水戸の湧水について調べました。湧水にまつわる伝承、湧水の生き物、自然、地域で守る湧水、たくさんの新しい発見がありました。

一つ目は、上国井町にある大井戸という湧水です。この湧水池には三つのコンクリート製の円筒があり、それぞれから水が豊富に湧き出しています。さらに、筒の外でも池の底のあちこちから砂をふき上げて湧き出していました。湧き出した水は、ごうごうと音をたてて田の用水路にそそいでいました。私は、「水戸にもこんな所があったんだ。」と感動しました。

この湧水は、古代より飲用や生活、農業用水に利用されていたそうです。今も古代の雰囲気を感じられました。あまり有名になって欲しくないけれど、伝えていきたい、残しておきたい場所です。

また、周辺の池や用水路には、ホタルの幼虫のえさになるカワニナがたくさん見られ、地域ぐるみで「大井戸ほたるの里」に取り組んでいました。ぜひ続けていきたいと思えます。

二つ目は、末広町にある茨城高校から七曲坂を下りたところにあるお茶の水湧水群です。この湧水群には、弓道場下湧水、七曲坂湧水、お茶の水湧水、祇園寺下湧水などの湧水があります。お茶の水湧水には、江戸時代に水戸藩の役人がこの湧水でお茶をたて、もてなしたという伝承があります。また、この湧水の周りには、小さな池がいくつかできていて、たくさんのザリガニがいました。

今年の夏休みには、小学校二年生の後輩とこの湧水にザリガニ釣りに行きました。

最初に、近くのコンビニで待ち合わせて、湧水まで案内しました。途中の七曲坂では、二人で曲り角を数えながらおりました。池の中にたくさんのザリガニを見つけて、後輩は「いっぱいいる！」と声をあげていました。一緒に来た後輩のお父さんもびっくりしていました。

次に、釣りざおの作り方を教えてあげました。木の枝に糸をつけて、糸の先にスルメを付けて、釣りざお代わりにして釣りました。そして、実際に釣ってみると、次から次へとたくさん釣れて、とても楽しそうでした。また、後輩が釣ったザリガニのおなかからは小さなザリガニが出てきました。後輩もそのお父さんもびっくりしていました。

今年の夏休みには、自由研究で神社や史跡の伝説について調べました。初めは、神社の御朱印マップを作ろうと思って調べ始めたのですが、調べていくと水戸にも千年以上の歴史を持つ神社がたくさんあることに驚きました。調べた神社には、昔の英雄や人々についての伝説や民話が伝えられていて、

古代水戸の様子を思い浮かべることができました。

私は今まで、徳川の時代以降の水戸しか知りませんでした。でも、今回古代の水戸を知り、特に有名なものはなかったけれど、水戸はとてもおもしろい街だと思いました。知ることはおもしろさにつながります。いろんな人に、自分の住んでいる街のおもしろさを発見してほしいと思います。そうすれば茨城を好きになる人が増えると思います。私はこれからも、茨城のおもしろさを見つけて伝えていきたいと思いません。

私の住む町の伝統行事

土浦市立土浦第四中学校 七年 井口裕貴

私の住む町には、色々な人が住んでいる。自営業の人、サラリーマン、戸建てに住む人、マンションに住む人、お年寄りから子どもまで、たくさんの方が住んでいる。そんな中、町内が一つになる行事がある。夏に行われる町内夏祭りだ。私の住んでいる町のお祭りは神社仏閣を奉るものではなく、誰でも参加でき、町内の人の絆を深めるお祭りだ。

その歴史は、祖父の子どもの頃から続いている。二十五年前に山車を新しく作り、町内の人をメインに構成する備前ばやしを立ちあげたそう。母は創設当初から、笛を吹いている。私も妹も幼稚園生の時におかめのおどりを習い始めた。そして私は昨年、太鼓の練習を始めるようになった。おはやしの練習は、公民館で、町内の人に教わる。私の太鼓の

先生は、同級生のお父さんだ。おはやしには、譜面が無いため、耳で聞いて覚え、順に受け継いでいく。私も上達したら、私より若い町内の子に引き継いでいくのだろう。そして私はいずれ、母に笛を教わって受け継いでいきたいと思っている。

これらの練習は、無料だ。仕事の合間や、休みの日に教えてもらう。年代の違う人との縦の関わり、また同年代の横の関わりもある。今の時代では、他人に叱られることなど、あまりないと思うが、このおはやし会では、自分の子どもでなくても、叱ってくれるし、誉めてもくれる。みんなが上手になろうと頑張り、少しでも上手になれるように指導してくれる。

夏祭りを迎えるまでには、たくさん町の人の努力がある。六月頃から、夏祭りのための会議がある。町内会、育成会、青年男性で構成する壮青会など、代表の人が集まって安全で、楽しいお祭りするために、話し合いを何度も行う。また山車が安全に巡行できるように草木の伐採、必要な物の買い出しなど、たくさんの人たちが、時間と労力をかけて準備を行う。

そして夏祭り当日を迎える。朝から準備を始め、婦人会の人たちが、手作りのおにぎりやうどんを出してくれる。夏祭りの食事は全て婦人会の人たちの手作り弁当だ。祖母も手伝っている。暑い中のお祭りで、手作りのご飯は、とてもおいしく、次の巡行への力となる。

巡行が始まると、綱の先導をする人、山車の舵をとる人、山車の上で指示をする人、綱をひく子どもを近くで見守る人、交通を整理する人、休けいで飲み物を配る人、そしてお祭り

を盛り上げる私も参加しているおはやしの人、たくさんの人達の協力で夏祭りが楽しめる。

そして二日間、町内のあちこちを練り歩く。暑くて大変だなと思う時もあるが、最後は、充実して楽しめたと毎年必ず思う。

私はここでお祭りは終了だが、たくさん大人の人が、翌日に片づけや清掃を行っているそうだ。

私は町内の夏祭りが好きだ。町内の人たちと参加できて、達成感を味わうことができる。

もう一つ、お祭りの良い所がある。それは、大学や就職や結婚で町内を離れてしまった人が、夏祭りのために地元に戻ってくることだ。すぐにとけこんで、夏祭りを楽しめること。もし私が地元を離れることがあっても、お祭りで町内の人とつながっていられることは、心強いと思う。

近くの地域では、人手不足などが理由で、お祭りをやらなくなったり、簡素化している場所がある。仕方のない事だが残念に感じる。私には、毎年お祭りに参加するくらいしか力になれないが、良い伝統として夏祭りが盛大に続いてほしいと思う。

自然豊かな勤行川

筑西市立下館中学校 一年 古 橋 葉津香

私には、小学二年生から続けていることがある。それは、週末と長期休暇の早朝、近くを流れる勤行川の土手まで家族でジョギングすることだ。

午前五時四十五分。玄関のドアを開け、朝一番のすがすがしい空気を吸い込み、庭で軽く準備体操をする。伸びた芝生の間から、シヨウリヨウバツタが顔を出し、私は「おはよう」と声をかけ、川へ向かって駆け出す。

途中、通り抜ける公園では、ミンミンゼミの大合唱が聞こえる。公園の向かいの家にはいつも三匹の猫たちが気持ちよさそうに伸びをしている。猫たちにも朝の挨拶をすると、もう目的地の勤行川が見えてくる。

カブトムシが樹液の奪い合いをしている木々を横目に、スプードをあげていくと、青と銀色の光線が目の前を横切った。光線の先に目をやるとそれは、カワセミだった。

筑波山が見える勤行川に着き、最後のコースの土手を走っていると、散歩をしている人たちが

「がんばれ、ファイト！」と応援してくれる。

早朝釣りに来ている人たちとも挨拶を交わす。

大きなシェパードを連れて夫婦はいつも同じ時間に同じ橋の上で会う人達だ。私が小学五年生の頃、

「この犬は牧羊犬なのよ。」

と教えてくれ、絵本の中だけで知っていた牧羊犬の実物を見た感動を今でも覚えている。腕を骨折して一時期、三角巾で腕をつって散歩をしていた頃は

「若いからすぐ治って、また走れるようになるよ。」と元気づけてくれた。

おいしい空気といつもの筑波山と町の人たちと朝の挨拶で私は元気な気持ちになる。

勤行川は、中学に入学したばかりの四月に学年全員で行った場所でもある。土手の桜が満開だった。まだ緊張と不安でいっぱいの中、なぜかほっとした気持ちで新しい友達と話すことができた。

今、私は美術部に所属していて、コンクールに向けた作品を手掛けている。それは、勤行川の風景画だ。雄大な筑波山を背景に、夏の日差しをキラキラ浴びた勤行川。そこには様々な昆虫や野鳥が生息し、散策を楽しむ人の姿も。私の大好きな下館の勤行川の景色を生き生きと描きたいと奮闘している。

気がつけば、私の生活にはいつも勤行川が身近にある。

自然も人の気持ちも豊かな勤行川。自然と触れ合い、色々な人との出会いは私の小さな発見の場所であり、元気の源になっている。

中学に入り部活や勉強で今までよりも忙しくなり、自分の思い通りにいかなくて歯がゆい時もあるけれども、勤行川で出会った人たちのように自分も豊かな気持ちの人間に成長できるようにがんばっていききたい。

そして、大切な下館のこの自然をずっと守っていききたいと

思う。

大切な町

大洗町立南中学校 一年 近 澤 夏 海

「わあ、きれい」

高い場所から見渡す大洗町の夜景は、色とりどりの光が、私の住んでいる大洗町を、とてもきれいに照らしていました。

先日、私は、母、妹と一緒に、マリントワーへ行きました。エレベーターを登りながら、少しずつ見えてくる、見慣れているはずの景色に、何故かワクワク興奮してしまいました。ドアが開き、目の前に写った夜景を見た時、私はドキドキが止まりませんでした。

海側には、電灯をつけて止まっているフェリー、そして、きれいに列になって並べてあるトラックの荷台。二十時を過ぎていのに忙しそうに動き回っている車や人々。町側には、家の灯りがともる中、大洗鹿島線の電車の電気が、丸を描くように動いていたり、車のライトがホタルのように行ったりきたりしていたり、信号機の色が三色交互に変わるだけでも何故か新鮮で、私は、この夜景に引き込まれていきました。どれくらい見ていたのか、時間を忘れてしまいうぐらいの素敵な夜景でした。こんな素晴らしい景色が、こんなに身近に、そして、私の住む大洗町にあったなんて、今頃気が付いた恥ずかしさと、うれしさで、胸が一杯になりました。機会があったら、皆も誘って、マリントワーへ行き、また夜景、そして

今度は昼の景色も見てみようと思いました。

私は、町の人に元気をもらっています。

「こんにちは」

と、私が言うと、

「こんにちは、大きくなったね。」

と、必ず話しかけてくれます。登下校中も、

「おはよう、行ってらっしゃい、気をつけて。」

と、声をかけてくれます。なにげないあいさつですが、大洗町の方達は、いつも温かく、私達を見守ってくれているような気がします。祖母がよく、

「大洗町の人達は、言い方は強いけれど、心は温かくて、いい人ばかりだよ。」

と、言っていた事を思い出し、「うん、そうかも」と、私は何故か納得してしまいました。

人と人、お互いを気遣うことのできる心を持っている方がたくさん住んでいる大洗町。私はずっとこの町、そして大洗町の人達と、離れたくないなあと思いました。

「あ、このサツマイモ甘くておいしい。」

と、妹がサツマイモを持って、話しかけてきました。

「私にも一口ちょうだい。」

と、一口もらって食べると、サツマイモの自然な甘みと、ホクホクした食感が口一杯に広がり、とても幸せな気分になりました。

大洗町で栽培される作物は、気候にも恵まれ、土もよく、季節によって色々な作物ができます。味も良く、私は大洗町の食べ物大好きです。祖父母は自営業を営んでいるので、

農家の方が沢山きますが、誰もが、やさしくて、この方達が作っているからきつと、大洗の作物はおいしくできるんだろ
うなあと、しみじみ思いました。

「涼しいね。」

夜、窓から入ってくる海風は、夏の夜とは思えないぐらい
さわやかで、涼しい風を運んでくれます。大洗町はとても過
ごしやすい町です。東京にいるおじさんが先日、大洗町に
来た時、

「いやあ、大洗町はやっぱり過ごしやすいね。大洗駅から下
りた時、海の香りも漂ってたよ。」

と、ニコニコ話していました。確かに、大洗町は、風が違
うのか、海からの風のおかげで、夏は涼しくて、それほど暑
さを感じないような気がします。

大洗町の魅力は、書ききれない程たくさんあります。人に
やさしい、そして、人がやさしい大洗町。これからも大洗町
を好きでいようと思いました。

私の町と暮らしと風景

水戸市立赤塚中学校 二年 岩 崎 真 麻

私の住んでいる水戸市には他にはないような良い所がたく
さんあって、とても住み良い町です。よく家族と訪れる場所、
偕楽園はすばらしく魅力があり、皆さんに知ってもらいたい
所です。

まず、偕楽園の中にある好文亭は、木造二層三階建ての木

造平屋造りで斉昭公が自ら設計したといわれていて、好文亭
から見ると四季折々の風景はとても美しく感動します。千波湖
も見渡せて、眺めが良く、自然の美しさは絶景です。私が特
におすすめたのは、二月中旬から三月下旬に開催される
「水戸の梅まつり」です。最上階の好文亭から見ると梅には
心をうばわれます。このような広大な園内をいつも眺めてい
た当時の殿様である斉昭公がともうらやましいです。梅の
時期は夜のライトアップも有名で「光の散歩道」期間の好文
亭から見ると景色は、昼間とはまた違った幻想的な風景とな
り夜景も楽しめるので、ぜひ皆さんに訪れてほしいと思いま
す。しかし、梅まつりでは多くの人が訪れるため、駐車場が
すぐに満車になってしまうのは残念だと思っています。以前、
お年寄りの方が駐車場が満車になり困ってしまったという話
を聞きました。また、道を訪ねられたこともあり、その方は
足が不自由なため休けい場所を探すことに苦労したというこ
とでした。その時、私はお年寄りや体の不自由な方たちが利
用しやすいようにボランティアの人達をもっと増やすのはど
うかと考えました。そして、休けい所やインフォメーション
スペースを設けて色々な人達に観光を楽しんでほしいので、
皆の意見も取り入れてほしいと思います。しかしそれだけで
なく、水戸市に住む私達が水戸の歴史と自然について学習す
ることも必要ではないかと考えました。

水戸市には自然のすばらしさと見所がまだまだたくさんあ
りますが、人の優しさに触れ合うことも多くあります。登下
校の時にはボランティアの方達の見守りがあったり、知らない
人でも道ですれ違くと笑顔であいさつをしてくださったり

して、とても安心することができます。笑顔は人を元気にしてくれて、心が和みます。私も見習って、笑顔であいさつをするように心がけたいと思います。人と人との触れ合いや、自然が豊かで住み良い水戸市が私は心が落ち着き、とても大好きです。この町にはまだ知られていない良い所がたくさんあり、外国の方や県外の人達にも水戸市を訪れて、魅力を知ってほしいと強く感じています。そのためには、常に発信する努力をし、積極的に、私達が行動に移すための知識を学び、皆と協力しながら意見を交換し、解決策を考える必要もあるのではないのでしょうか。そうすることによって水戸市の魅力がだんだんと上がってほしいと思います。訪れた方達が、また水戸市に観光したい、そして他の人にも水戸市を紹介したいという気持ちになってくれることを願っています。

私の町の魔法使い達

土浦市立土浦第一中学校 八年 染谷音羽

「おはようございます。」
「おはよう。行ってらっしゃい。」

朝の挨拶が返ってきた時の嬉しさは、それからの一日を充実させる第一歩になります。

私は、小学生の頃から、すれ違ったら挨拶するように言われてきていました。ただ、まわりが誰も挨拶をしないと、恥ずかしくなって声が出ませんでした。それに、一度、挨拶をしても返ってこなかったことがあり、独り言を言っただけではないかと、少し悲しくなりました。それから、どうせ人に挨拶しても返ってこないし言うだけ恥ずかしいと、よくない考えが付いてしまったのです。

ところが、まだ小学生だったある日、朝、登校班の集合場所まで待っていると、小学校を卒業し、中学生になった近所のお兄さんが、

「おはようございます。」

と、元気に挨拶をし、一緒に集合場所にいた、近所のお母さんが、

「おはよう、気をつけてね。」

と、ニコニコと返したのを見て、うわあやっぱり挨拶っていいなあと心から感じたのです。その時、私はただ一緒にいただけだったけれど、その瞬間の元気やエネルギーを分けてもらった気分でした。

それがきっかけで、また挨拶をするようになったのです。今でも、登校するときに、すれ違う近所の人には極力挨拶しようと思がけています。

朝早くから、道路を掃除しているおばさんや、小学生の付き添いで来ているお母さんに挨拶すると、必ず返ってきます。私の町の人は、挨拶を返してくれるのです。

たった数文字の言葉だけで、人はこんなに良い気分になれるのです。在り来たりかもしれないませんが、挨拶は、「魔法の

言葉」ですね。

私の町の人達は、魔法の使い方が上手です。ただの挨拶だけでなく、気をつけてね、と声をかけてくれたり、いつてらっしゃいと言ってくれたり、時には、朝早いね、部活？と質問されて、少し会話が弾んだり。ちよつぱり気怠い朝も、少し和らぎます。

ただやつぱり、返ってこないんじゃないかと思うと、するかしないか迷います。でもよく考えると、するかしないかなら、した方がいいに決まっています。返ってきたら、嬉しくなるんだという気持ちに賭けるのです。

挨拶は、朝の挨拶だけではないですね。お礼の言葉、あやまちをわびる言葉、敬意や謝意を表す言葉。たくさんあります。全て魔法の言葉です。

先にもあげましたが、私の町の人は、魔法が上手です。何気なく使います。それで私はまんまと魔法にかかります。ただ、これは幸せの魔法です。勇気を出せば、誰でも使えるようになります。いつか、もっともっと広い世界で使われるようになってほしいです。

私の町の人は魔法が上手です。その貴方も、私の町の魔法使いを見習って、人を幸せにできる、簡単なのに素敵な魔法、使えるようになりませんか？

五感で感じる茨城の魅力

高萩市立秋山中学校 二年 作 山 叶 恵

私が住んでいる都道府県、茨城県は魅力度ランキングが六年連続で最下位になっている。このランキングの意味を私は考えた。誰が何を基準にして都道府県に順位をつけるのだろうか。確かに、東京都や神奈川県と比べると華やかさは欠けているのだろう。しかし、実際に住んでいるからこそ見えてくる魅力があるはずだ。

茨城県を代表する名産品と言えば、納豆を真っ先に思い浮かべる人も多いだろう。茨城県は農業が盛んで、近郊農業を行っている都道府県の例として教科書でも挙げられている。白菜、さつまいも、ピーマンなど普段の食卓に出てくるこれらの生産量が全国一位となっている。これは茨城の名産品として売り出すべきだ。豊かな自然の下で育った野菜を、食べられる幸せは、住んでいるから確認できたことである。

名産品の時に出てきた、豊かな自然を忘れてはいけない。筑波山や袋田の滝などは、美しい観光スポットとして地位を確立してきた。私が住む高萩市にも花貫溪谷という紅葉が楽しめる場所があり、県内外から観光客が押し寄せている。自然を生かしたスポットは、人為的に作られた娯楽施設にはない苦労がある。それは、ゴミのポイ捨てなどのマナー違反で景観が損なわれないようにしなければならないことだ。娯楽施設では、従業員の人が掃除を行ってくれるだろう。しかし、自然を生かした観光スポットではそれができない。だから、

観光客はもちろんのこと、地元の人との協力が必要だ。自然が美しいのは、地元の人とその土地への愛着と結びついているのかもしれない。

茨城県が田舎くさいと言われていていることがある。残念だが、なぜ言われるのか原因を考えてみると、茨城弁のイメージが強いのだろうという考えに至った。他県から見ると、「怒っているみたい、早口過ぎる。」

という見方になるのだろう。しかし、実際に住んでみると訛りはあまり強くないことがわかる。私は、茨城弁を聞くと何だかほっこりするような温かい気持ちになる。相手を思いやる優しい気持ちで溢れているからこそ、このような気持ちになれるのだろう。茨城弁は田舎くさくはない、ということを多くの人に主張していける未来を望みたい。

農業、自然、方言の良さを五感で常に感じられること——。これが、茨城県民だからこそ分かる魅力なのだろう。不便でもいい、私にとっては、「魅力度一位」の都道府県になっているのだから。もし誰かが

「茨城県の良さって何？」

と聞いたらあなたは何と答えるのか。恐らく百人に聞いた場合、百通りの答えが返ってくるだろう。その百通りの良さを誇れるような県にしていきたい。そして、私が大人になった時に観光客の人や地元の人が笑顔になれる場所にしたい。

良い点を見つけ、生かし、広めていく。これが茨城県に住んでいる私たちの願いであり、役割なのだから。

つなぐ

茨城県立並木中等教育学校 二年 菅原 紡 宜

「人と本をつなげる古本市。そこでは、人と人、そして、想いと想いもつなげていた。」

初めて古本市を知ったのは、僕がまだ小学生のころ。母に連れられて、古本市に行きました。

母の知り合いが、ボランティアでやっている、読み聞かせのグループ主催の古本市でした。

本がとても好きだった僕は、

「どんな面白い本があるのかな。」

と興味を持ち、古本市に行ってみることにしました。

僕自身もそうですが、新しい本との出会いに感動させられる方も少なくありません。これが、古本市の「人と本をつなぐ」力だと思えます。また、以前の持ち主の方から受け継がれるというのも古本市の面白いところだと思います。

さて、古本市当日、当然素晴らしい本との出会いがあったのですが、それよりもっと素晴らしい発見がありました。それは、古本市が、「人と人をつなぐ」場でもあるということです。

当日の朝だけでも、机を並べたり本を並べたりと、そうだけでなくも忙しいのに、母から事前準備の内容を聞いて大変驚きました。

なんと、売られている本は全てご厚意で寄付されたもので、更にそれらをジャンルごとに分別し、汚れを落とし、値

付けをするといった作業を事前におこななければならぬのです。そして、なんととっても本は重い。女性のスタッフだけの作業は、本当に大変だったことでしょう。

これだけ手間のかかる事を、しかも、ボランティアでされている古本市の方々に対し、

「凄い。」
の一言しかありません。

そんな発見もあり、翌年はお手伝いもさせていただきました。「人と人のつながり」がまた少し広がったのです。

古本市に来てくださった本好きの方々ともつながることが出来ますし、僕のようにお手伝いをさせていただくことで、ボランティアの方々ともつながることが出来ました。

古本市に誘って下さった方とはもちろんのこと、ほかの方々ともたくさんコミュニケーションをとることが出来ました。普段、僕は地域との関わりが薄かったので、

「地域の方とコミュニケーションがとれる場所があるのは、幸せなことだな。」

と、しみじみと思いました。

さらに、この古本市にはもつと凄いつながりがあったのです。

古本市での利益の一部は、関東・東北豪雨で被災された常総市の図書館へ寄付されたそうなのです。

これは、「想いと想いがつながった」ということにならないでしょうか。

最初は、「面白い本があったらいいな」という単純な興味だけで足を向けた古本市でしたが、地元で活躍するボラン

ティアさん達との出会いから、多くのことを学ぶことができました。また、自分がお手伝いできたことは、わずかな力かもしれませんが、被災され困っている方たちへ、その想いは届けられたのではないかと思います。

「人と本」、「人と人」そして、「想いと想い」をつなげることができた古本市。このような活動が、自分の住む地域に根付いていることは、とても幸せなことだと感じました。

このような「つながり」を広げていける活動が、もつと活発になればいいと思います。僕も、「つながり」の一部を担えるよう、積極的に関わっていききたいです。

私の理想の町

日立市立助川中学校 三年 松下 彩 菜

私は、みんなで楽しくすごせる場所が、理想の町だと思う。最近、異常気象や地球温暖化などといった言葉をよく聞く。もちろん、大荒れの天気や異常な暑さなど、誰もうれしくないだろう。つまり、そうなった時点で、私の理想の町を作れなくなる。だから、環境面を整えることが大切だと思う。私は、環境面を整えるためには「エコ」を心がけることが大切だと考えた。

まず、私がエコと聞いてすぐに思いついたのは、電力の使用道の工夫についてだ。地球温暖化の原因の一つは、二酸化炭素の増加だといわれている。電力の使用道を考えれば、二酸化炭素の増加が防げると私は思う。特に、エアコンがカギ

を握っていると思う。私の学校にはエアコンがついている。そのため、学校で快適に過ごすことができる。しかし、クラスのみなが暑さになげいている時、私は正直、エアコンを今、つける必要はないと思っっていることが多い。もちろん、暑さの感じ方に個人差はあると思う。だが、さすがにみんなは、エアコンに頼りすぎていると思う。ここに私は、電力の無駄が生じていると感じる。ここで少しでも、エアコンに頼ることがなく生活することができれば、無駄を少しでも抑えることができる。では、エアコンに頼りすぎないためには、何をすればいいのだろうか。せんすやうちわといった昔から日本にある道具を使えばいい。これらは電気を使わないので、エコだし、とても涼しい。なのになぜ、みんなこれらを使わないのだろうか。たぶん、手を使って自分でおおがないといけない所に、めんどくさいと感じているのだと思う。でもこれで、少しではあるが、二酸化炭素の排出量を減らすことができるから、限界はあるが、これらで涼むのもいいと私は思う。また私はゴミの量を減らすことで、エコにつながると考えた。その中で特に注目したのはレジ袋だ。最近、コンビニでレジ袋の有料化が決まった。レジ袋は確かに便利だと思う。その一方で、レジ袋はエコバックに比べて弱いので、すぐに捨てる必要がある。つまり、ゴミがたくさん出るのだ。しかし、エコバックより、レジ袋の方が店で買えるから便利だ。だが、エコバックを持ち歩けば、不便にはならない。だから、レジ袋を使うのではなく、エコバックを使えばいいと思う。また、レジ袋の大量使用は私たちの生活を危機に近づけている。レジ袋は石油できてきている。しかし、石油の寿命は残

り約五十年といわれている。石油がなくなるとは、私たちの生活に大きな影響をもたらす。そもそも石油は、プランクトンの死骸などが長い年月をかけて、変化してできたものだ。だから、足りないからつくるといふ訳にはいかないのだ。更に、石油がなくなると多くの電気を作ることが難しくなる。私たち日本でいちばん多くの電力を作っているのは火力発電所だ。だから、燃料である石油がなくなれば、多くの電気を発電するのは難しくなるだろう。このように石油がなくなると私たちがとても困るのだ。そうなる日ができるだけ遠くするためにも、レジ袋をできるだけ使わないようにするべきだと思う。

「エコ」と聞くと、すごく難しいことなのだろうと考える人も多いだろう。でも、エコについて少し知って、環境のことを少し考えて、行動を少し変えてみるだけでいいと私は思う。少しの行動でもずっと続けていけば、大きな行動になる。私は、みんなに少しの行動をする努力をしてほしい。あなたの行動が地球を救うかもしれない。私はみんなとこの地球を救いたい。そのために私は今日も少しの行動を意識して、行動する。

私の住む町

東海村立東海南中学校 三年 相澤 萌 夏

私は、緑に囲まれ、恵まれた環境で生活できるこの町が好きだ。

その中でも特に好きな風景がある。それは学校の帰り道に見える風景だ。大通りから外れ畑の中に一本だけのびる、車がすれ違えないくらい細い道。畑には、春や夏は作物が青々と伸び、秋は黄金色の小麦が広がる。時にはキジやウサギなどが姿を見せることもある。そして、空を見上げると、早帰りの日は真っ青な空を、部活終わりには真っ赤な夕陽を見ることができる。この風景が私が特に好きな風景であり、この町が好きが一番の理由だ。

私はあまり学校に行くのが好きではない。勉強や部活で疲れたり、友人関係で悩んだりすることも多い。それでも、この風景を見ると、世界がとても広く感じ、自分が小さく思えてすべての問題がどうにかなる気がしてくる。この風景は私のネガティブな気持ちを一瞬で吹き飛ばし、ポジティブな気持ちにしてくれる。この風景と出会えたからこそ、私は今まで頑張ってきたのだと思う。

私がこの町を好きな理由はもう一つある。それは、人の温かさだ。私の家の近所の人みんな優しく、会うたびに「大きくなったね」と声をかけてくれる。中には私の好きな野菜を覚えていてくれて、自分の畑で採れたその野菜を分け合ってくれる人もいる。東日本大震災の時も水や食べ物を分け合った

り、お互いに気を配ったりして、当時幼稚園児だった私も安心することができた。このように普段から温かく接してくれる人がいることで、この町は私にとってとても居心地のいい場所になっている。

また温かいのは地域の人だけではない。学校の先生や友達もとても温かく接してくれる。私が学校を長い間休んでいた時は、優しく話しかけてくれ、行事の時には、一緒に盛り上げてくれる。そんな友達はその大切な宝物だ。友達と同じように先生も大切な存在だ。幼稚園の先生は行きたくない駄々をこねる私を叱ることなくだめてくれた。小学校の先生は時に厳しく、時に優しく私たちに接してくれた。楽しいことばかりではなかったが、大事なことをたくさん教えてくれた先生には、とても感謝している。そして、今も勉強をはじめとするたくさんのお話を教えてくれる中学校の先生。授業の中で分からないところは丁寧に教えてくれ、普段は明るく気さくに話し、相談にものってくれる先生がいることで私は勉強に励み、楽しい学校生活を送ることができている。

このようにこの町には、大好きな風景があり、私を支えてくれる多くの人がある。私は大好きなこの町にいつまでも明るくあってほしいと思う。そのために私は、感謝の気持ちを忘れず、地域の行事に積極的に参加するなど、明るい町のために貢献していきたいと思う。

審査講評

令和元年度 作文コンクール

審査委員長 茨城大学教育学部教授 川嶋 秀之

茨城県知事賞をはじめ各賞を受賞された皆様、まことにおめでとうございます。

今年度の作文のテーマは「わたしの住む町」としました。自分の住んでいる町の暮らしや風景、紹介したい町の人々の助け合い、科学技術を使った町づくりなど、自分の町の良さを見つめなおしその魅力を伝えてもらおうと思ったからです。応募総数は、一二、四三五点ありました。作文を読んでもおきますと、それぞれの町の風景やそこに住む人々の姿が多様でかつ個性的で、あらためて茨城の広さと魅力を感じることができません。

以下、「茨城県知事賞」を受賞した作文について紹介します。

小学校低学年の部…平野雄大さん「この夏のであい」は、生まれて初めてカブト虫を捕った体験を書いています。カブト虫は木の高い方についてなかなか捕れません。そこで網をつないで長くして、カブト虫と捕るか逃げられるかの攻防戦が

展開されます。捕る時のワクワクする気持ちや捕まえた時の喜びがとても生き生きと書かれています。

小学校高学年の部…成田帆花さん「だがし屋のおばあちゃん」は、近所の駄菓子屋のおばあちゃんの姿を描いています。ここではおばあちゃんとたくさん話をします。おばあちゃんとのやり取りを通して言葉の使い方を学び、買い物を通してお金の計算の仕方を学びます。お母さんもそのようにして駄菓子屋さんで学んだということです。駄菓子屋さんは親子二代の楽しい学校ともいえそうです。おばあちゃんの駄菓子屋さんがいつまでも続くといいですね。

中学校の部…戸崎千尋さん「私がいる茨城の中の二つの町」。戸崎さんは那珂市の菅谷に住みながら水戸市の国田に通っています。菅谷にはスーパーや病院や本屋さんがあるのに、国田には便利なお店が殆どなく夏になると蚊が多くあまり好きではなかったそうです。それが昨年、国田の田んぼで取れた新米を食べてあまりのおいしさに一変します。国田が好きになって、今は好きな町二つに住む幸せを感じています。国田のお米の美味しそうな様子が文章からも伝わりました。国田の米は那珂川の氾濫があるから栄養たっぷりです。美味しいのだというくだりでは、なるほどと思うと同時に、今年は台風の影響で洪水が起り被害が大きかったので早く復興して

ほしいと思わずにはいられませんでした。

「日立財団 小平記念賞」を受賞した作文からも一つ紹介しましょう。

小学校低学年の部…眞家花奈さん「わたしの住む町」は、「つくばちびっ子はかせ」というスタンプラリーについて書いています。国土地理院で3Dめがねをかけて立体画像を見たり、産業技術総合研究所で紫外線に反応するストラップを作ったりした体験を読みますと、さすがこれは科学技術のつくば市以外では体験できないことと痛感しました。

最後にご指導に当たられた各学校の先生方に謝意を表し、講評と致します。

令和元年度作文コンクール 審査委員

川嶋秀之
床波忠明
田口克弥
岩田利美
内桶博仁
大高茂樹
潮田昌造
小林由士郎
井坂英二
大久保昌義
池田智子
加藤欣一
川野和彦
河野公房
菊地寿代
古山均
島田百子
菅谷京子
寺内義興
福間智子
西村重之